

無限の幻夢

～被虐異世界遍歴の果てに



濠門長恭

目次

1章 囚われの王女	*ミリアム*	- 3 -
1-1	ここは中世西洋？	- 4 -
1-2	プロポーズは拷問	- 41 -
1-3	三角木馬上の処女	- 79 -
1-4	婚約者の裏切り！	- 94 -
1-0	やっぱり夢だった	- 111 -
2章 お嬢頭目	*シイラ*	
2-1	裸体を囮に大誘拐	
2-2	女王様モードなの	
2-0	憧れの先生に相談	
3章 金髪の軍国少女	*操子*	
3-1	結び瘤禪で早足練習	
3-2	大和魂を肉体に注入	
3-3	級友にはレズ指南で	
0章 不良処女	*美里*	
0-1	服装違反で全裸指導	
0-2	違反の罰は公開鞭打	
0-3	正常と異常の大逆転	
0-0	夢の終わりと始まり	

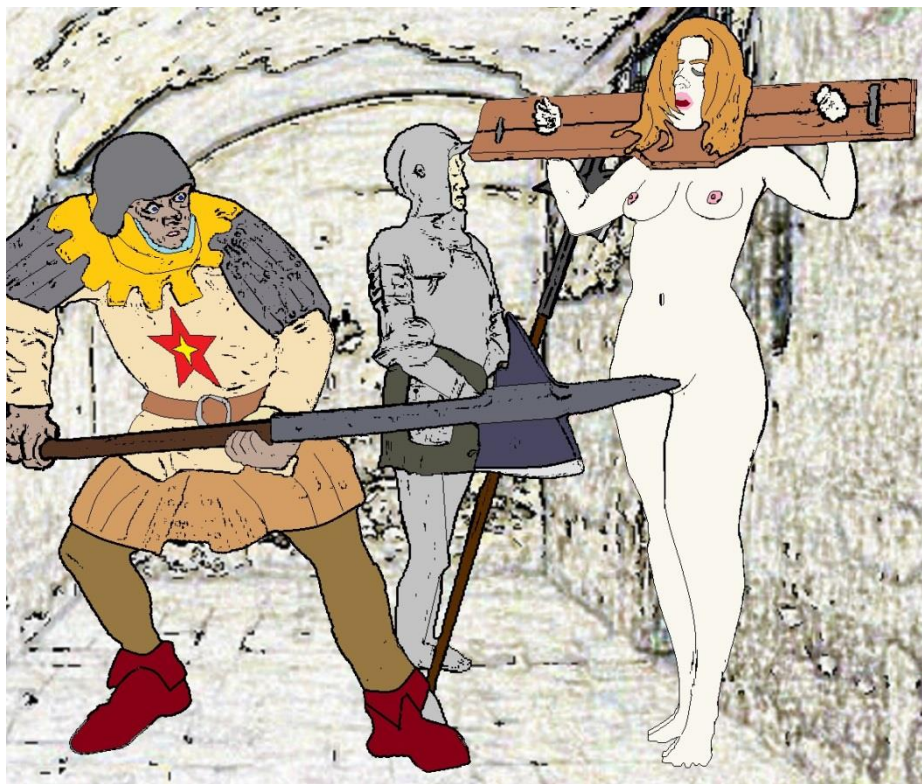
後書き

注記：各イラストは内容に即したイメージです。

本文中の場面を描写しているとは限りません。

1章 囚われの王女

ミリアム



1 - 1 ここは中世西洋？

「おやめください。ここは姫様の寝室です」

「マムゼル、そこをどきなさい」

「狼藉は許しませぬ……あれ、なにをなさいます！」

言い争う声と人のもみ合う気配に、白石美里は目を覚ました。どちらの声にも聞き覚えがあったが、だれなのか思い出せない。両親でないことはたしかだった。深夜にお客が来たとは思えないし。もしかして、こっそりアダルトビデオでも観てるのかしら……？

ベッドの中で耳を澄ましているうちに、美里は奇妙な感覚に襲われた。月明かりのせいだろうか、部屋の様子が変だった。見慣れない調度品のシルエット、やけに高く感じられる天井。

(いったい、ここは……？)

彼女が起きあがろうとしたとき……

バァン

ドアが激しい勢いで開いた。赤っぽい光が部屋に流れ込む。数人の男が、燃えている棒を持ってどやどやと入ってきた。

(放火魔……?! 強盗……!!)

彼女は跳ね起きた。跳ね起きて——鋭い声で侵入者たちを叱責した。

「無礼者! こんな夜更けに何用です」

呆氣にとられたのは、侵入者ではなく美里のほうだった。

(なに、これ……?)

透き通るように高く、それでいて威厳のある声は、自分のものではなかった。言葉遣いも違っていた。いや、言葉そのものが……日本語ではなかった。

戸惑っている彼女に、ひとりの男が歩み寄った。短く刈り込まれた髪が、松明に照らされて赤く輝いているように見える。

「そなたはダルタン」

意識しないうちに彼女の口が動いていた。この男は近衛隊長のダルタン子爵だ——記憶

の底から浮かび上がってくる、もうひとつの記憶。

「国王夫妻はクロード宰相の命により、さきほど粛清されました。ミリアム殿、あなたも逮捕せよとの命令です」

男の言葉も日本語ではなかった。音の響きは、なんとなくフランス語を連想させた。もちろん、単語も文法も理解できなかった。なのに、言葉全体の意味は分かった。そして、彼女は男の言葉に激しく反応した。

「クロードが……父王陛下と母妃を弑したと申したのですか！？」

ダルタンは、曖昧に首を振った。

「……クロード宰相の命令を受けた者が」

「おお……！」

彼女は両手で顔をおおってベッドの上に倒れた。

激しい感情が彼女の心に渦巻く。驚きと悲しみ、そして怒り。だが、それだけではなかった。そんな心の動きをぼんやりと眺めてい

るもうひとりの彼女がいた。それは、自分を白石美里だと思っている意識だった。

そう……ベッドに倒れて涙を流している彼女は、美里ではなかった。援助交際なんかしなくてもブランド・アイテムくらいは揃えられる、ちょいリッチな両親に恵まれているけれど、あとはこれといってとりえのない平凡な●校2年生の女の子……ではなかった。

彼女はミリアム・ペルブラン。小国ながら血筋は名門の、ペルブラン家の王女だった。いや……父母亡き今、彼女こそがこの国の正当な支配者なのだ。弟のミシェルは、王位を継ぐには幼すぎた。

「ミリアム殿、我らと同道願いたい」

肩に手をかけられて、ミリアムは我にかえった。

「どうか、私に手荒な真似はさせないでいただきたい」

この人はミリアムの味方かもしれない。美里は、そう感じた。が、ミリアムはダルタン

の手をはねのけ、彼に殴りかかっていた。

「黙れ、謀反人！」

ダルタンはミリアムの打擲をよけようとはしなかった。かりそめにも近衛隊長を勤めるほどの武人を、王宮でたおやかに育てられてきた●6歳の少女が傷つけられるはずもなかった。ミリアムが殴り疲れるのを待って、無雑作に手首をつかんだ。

「お願いですから、おとなしく我らについて来てください」

「いやです！ 謀反人の命令など受けません」

身をよじってダルタンの手を振りほどこうとするミリアム。

「致し方ありません。狼藉、ごめん」

ダルタンは部下の兵士に命じて、ミリアムの手首を縛らせた。

ミリアムの抵抗が不意にやんだ。呆然と、自分の手首に巻きついた縄を見つめるミリアム。いまだかつて、このような屈辱的な扱いを受けたことはなかった。

「歩いてください、ミリアム殿」

手首を前に引かれると、ミリアムは夢遊病者みたいにゆっくりと足を踏み出した。

(夢を見てるんだわ……)

兵士たちに前後をはさまれて廊下を歩きながら、美里は考えていた。

素足に伝わってくる大理石の冷たさや、手首に食い込み縄の痛みは、夢にしてはリアルすぎるように思うけれど。ミリアムやダルタンの使う外国語が分かるなんて、夢でなければありえないことだ。それに。美里の意識とミリアムの行動とは、食い違っている。主人公になりきって映画を観ているときの感じに、ちょっと似ていた。そっちへ行ったら罠があると分かっているけど、主人公はそっちへ行ってしまうという、あのもどかしさ。

廊下の途中の壁に、大きな鏡が掛けられていた。全身を映せるほどの鏡は、この世界では高価な品物だということを（ミリアムの知

識として) 美里は思い出していた。その場で記憶が甦ってくるなんてご都合主義も、夢だからだと思う。

ミリアムの目をとおして、美里としての意識は、ヒロインの容姿にしっかりチェックをいれていた。背中の中分あたりまで流れた、ちょっとカールした黄金色の髪。髪を結い上げてサークレットでも着けると、そのボリュームに負けてしまうかなと思える、華奢な卵形の顔。ちっちゃめだけど品良く整った鼻。現実の美里より、ちょっと長めの髪と、ちょっと可愛い顔。そしてボディも――ほっそりしたウェストと、バランス良く盛り上がった胸（Bカップくらい）とお尻。どうしてボディラインまで分かるかというと――薄物の夜着が松明の光に透かされて、ピンクに染まった肌の色までくっきりと、大鏡に映し出されていたからだった。それは、被虐のヒロインにふさわしい姿だった。

被虐……そう、美里はマゾ願望を持っている

た。

憧れている先生にスカートをまくり上げられてお尻をぶたれたりとか、スケ番グループに目をつけられて全裸リンチにかけられたりとか、お前は母親の不倫でできた子供だと父に宣告されて母の代わりに罪の償いをさせられたりとか。そんな妄想に耽りながら（たいてい、そっと指を動かしながら）眠りに落ちていくのが、ほとんど習慣になっていた。自分とは時代も境遇も性格も違うヒロインが、責められ罵られ虐められ犯されるときもあった。その中でもお気に入りのひとつが、このシチュエーションだった。だから、これは絶対に夢のはずだった。

そして、ミリアムを待ち受ける運命を、美里は知っていた。

——背丈の3倍はある大きな扉がゆっくりと開いて、ミリアムは被虐の舞台に立たされる。

すべてのシャンデリアに蠟燭がともされ、

大広間はあたかも盛大な夜会が開かれているかのように明るかった。だが、着飾った貴族や婦人たちの姿は、そこにはない。かわりに、ふだんは大広間に立ち入ることを許されていない下級兵士たちが武装して壁際に並んでいた。身分のある者たちは玉座のまわりに集まっていたが、それほど多くはなかった。彼らの服装も、王宮に参内するにはあまりに見苦しい厚手のシャツに革の胴着やズボン、軽装の鎧をまとっている者さえいた。大広間全体が、ひどく陰惨な雰囲気に満ちている。

そして、本来は国王が座るべき玉座には、でっぷり太った男がふんぞり返っていた。禿げ上がったひたいのてっぺんでモジャモジャとのたくっている黒髪、対照的にぴんと左右に張り出した口ひげ。宰相のクロードだった。クロードは笑みを浮かべている。しかし、それはミリアムの見慣れたお追従笑いではなかった。見る者の神経を逆撫するような、下卑た笑顔だった。そして、充血した目を飢え

た野獣のようにぎらつかせて、あたりを睥睨していた。

その視線のまん前に、ミリアムは引き出された。

「ご命令により、ミリアム殿をお連れしました」

クロードにおざなりな会釈をして、謀反に加担した貴族たちの列に引き下がるダルタン。呼び捨てにはせず、しかし正式の敬称たる「殿下」を使わなかったところに、ダルタンの苦衷が表われている。

クロードは、下卑た笑いを口元に貼りつけてミリアムを見下ろしている。

ミリアムは謀反の首謀者をまっすぐに見つめた。

「クロード、何ゆえこのような愚かな真似におよんだのですか」

ミリアムの声はかすかに震えていたが、王女としての威厳をまだとどめていた。

「愚かなのは、あなたの父上ですぞ。隣国の

王子とあなたとの婚約。これは、我が国を相手方に売り渡すに等しい所業ではありませんか。それゆえ、ロベルト殿にはやむなく王位を降りていただいたまでのこと」

「……………」

それはとんでもない言いがかりだった。隣国のエルバインは強大な武力を背景に領土を拡大し続けている新興国家だった。そしてペルブラン家の治めるアルザスは、小国ながら古くからの血筋を生かして外交に強い。両国の結びつきは、互いに得るところが大きいのだ。無論、まったく対等の同盟というのとは不可能かもしれない。武力の強い国のほうが優位に立つのは、やむをえない。しかし、それは国を売り渡すことにはならない。外交手腕を駆使して、結局はこちらの思いどおりに相手を動かすことも不可能ではないのだ。

政治の教育を受けていないミリアムは、そういうふうに筋道を立てて反論することができなかった。というより。

美里は、不意に意識の中に出現した若い男のイメージに圧倒されていた。ミリアムの及びもつかない幅広い教養、ミリアムの見知っているどんな男よりも強く鮮やかな剣術の腕前、ミリアムの意地悪な質問にも辛抱強く答えてくれる優しさ、ミリアムの気を遠くさせる甘い笑顔、ミリアムの華奢な身体を引き寄せる逞しい腕、ミリアムの顔をすっぱりうずめてしまう分厚い胸、ミリアムのミリアムのミリアムの……ミリアムの婚約者、ラインハルト・ベナル！

イメージの中の婚約者は、ミリアムを優しく見つめていた。裸も同然の薄物しかまっついていない、今のミリアムを。

ミリアムは羞恥に身悶えた。

「わたくしには政治向きのことは分かりません。それよりも――主君の娘を、このように晒しものにしてよい道理がありましょうか。この縄をほどきなさい。それから、なにか着るものを」

その抗議に残虐なサディストがどう反応するか、美里は知っている。ミリアムの感情とは関係なく、美里は期待にわくわくした。

クロードは、美里のシナリオに忠実に振る舞った。

「おお、これは失礼いたしました」

玉座の上で、言葉つきだけはていねいに、クロードはミリアムに詫びた。

「あなたの身分にふさわしい姿でお連れするよう、ダルタンにはきつく言いつけておいたのですが……ダルタン、命令を忘れたのか」

「しかし、それは……あまりに……私には、とてもできません」

ダルタンの声に混じる悲痛な響きに、ミリアムは気づかない。この屈辱的な扱いから解放されると信じていた。

クロードは軽く舌打ちした。

「よかろう。お前の忠誠ぶりについては覚えておく。シャノン、あれをミリアム殿につけていただけ」

名前を呼ばれた男が玉座の下から進み出て、ミリアムの縄をほどいた。

ほうっと息を吐いた瞬間、ミリアムは肩を強く押しつけられた。

「なにををする。痛いではありませんか」

ミリアムは男を叱りつけたが、肩に加わる力は緩まなかった。ミリアムは床に膝をついた。

「クロード。この男の無礼を……ああっ、なにを……！？」

ミリアムは悲鳴をあげた。背後から首筋に、なにか大きな固い物が当てられた。兵士がふたり、彼女の両手をつかんで肩の高さに引き上げた。別の兵士が、分厚い板を正面から首に押し当てる。板の縁には三つの半円がくり抜かれていた。首を入れる大きな穴と、手首を固定する小さな穴とが。板は背後から当てられていた同じ形状の板と合わさり……

ガチャリ！

板の縁に並んだ金具が閉じられる。悲鳴が

途切れるより前に、ミリアムは首枷を掛けられていた。

「……………」

縄目を受ける以上の屈辱に、ミリアムは言葉をうしなった。

呆然としているミリアムの背中を、シャノンが乱暴に突き飛ばす。

「ああっ……！」

ミリアムは、前のめりに倒れた。床に打ち付けられた首枷が喉に食い込んで、息が詰まった。

「おやおや。大広間で寝そべるとは、お行儀のよいことだ」

クロードの嘲笑にミリアムは逆上した。

「おのれ。これが主君の娘に対する仕打ちですか！」

クロードが玉座から身を起こして、倒れているミリアムの鼻先に立った。

「左様——売国奴の娘にふさわしい仕打ちではありましような」

「な……！？」

ミリアムは、クロードが自分を辱めるつもりでいることを、ようやく悟った。

「さっさと立っていただきましょうかな、姫君。それとも、その可愛らしいお尻を皆に見せようと思し召しですか」

膝をついてお尻を突き出した姿勢で床に突っ伏しているミリアムを、クロードはわざと慇懃な言葉で嘲った。

言われるまでもなくミリアムは身を起こそうとしたが、首枷が重くて動けなかった。

「なるほど。見せたいとおっしゃる？　しかし、お尻の鑑賞会は後まわしにしましょう。片付けねばならぬ問題が、いろいろとありますからな。さあ、立っていただきますぞ」

「きゃあっ！　やめてえ……」

背後から乳房を掴まれてミリアムは悲鳴をあげた。

乳房をすくい上げる形で、クロードはもがくミリアムを引き起こした。そうやって立ち

上がらせて、彼女の正面に回り込む。

「む、無体な……」

唇をわななかせて抗議するミリアムを、クロードは好色な目つきで眺める。視線のほとんどは、透けて見える乳房と太腿に集中していた。

「……分かりました」

謀反人に道理が通じるはずもない。最後にミリアムは弱々しくつぶやいた。

「わたくしを売国奴の娘に貶めようというのでしたら、そうするがいい。でも、せめてガウンのひとつくらいは与えてください」

「残念ながら……」

クロードは、首を横に振った。

「ここには、姫君に着ていただくガウンなどありませんので」

「そんな……では、わたくしの服を誰かに持って来させてください」

王女としての命令口調ではなかった。だが（もちろん）、ミリアムの哀願がクロードに通

じるはずもなかった。

「姫君の服？ 売国奴の一族は財産をすべて没収されるという法律を、姫君はご存じないようですね——おお、そうそう」

クロードは、広間に居流れる謀反の同盟者たちに向かってうなずいてみせた。

「このわしとしたことが、うっかり見逃すところであった。薄物一枚といえども、財産には違いないではないか」

ミリアムの着ている夜着に手をかけると、一気に引き裂いた。

「いやあっ……！」

絹の裂ける音は、ミリアムの悲鳴にかき消された。

夜着の裂け目からこぼれた乳房を隠そうとして、床にうずくまるミリアム。クロードはさらに夜着を引きちぎって、白くすべやかなミリアムの背中を、みずみずしく張りつめた尻を露わにしていく。あっという間に、夜着は無数のぼろ屑と化して床の上に散った。も

はや、ミリアムの肌を隠すものは何もなかった。

あまりの屈辱に、ミリアムは抗議どころか悲鳴すらあげることができなかった。

「では、立っていただきましょうかな。姫君」

あざけり鬨るクロードの声。

ミリアムは、ただうずくまって全身をわななかせるばかりだった。が、兵士たちに両側から首枷を引き起こされては、自分の意思に反して立ち上がるしかなかった。

首枷に視界をさえぎられて、ミリアムは自分の首から下を見ることができない。それだけに、いっそう羞恥心があおられる。せめて恥ずかしい部分だけでも手で隠したい。ミリアムの悲痛な思いに、さすがの美里も同情した。でも心の底では、ミリアムとして、もっともっと陵辱されたいと願っていたのだろう。両手まで首枷に拘束されたミリアムは、愛らしく膨らんだ双つの半球はおろか、淡く可憐にそよぐ叢さえも隠すことはかなわず、穢れ

を知らぬ処女の裸身をクロードばかりでなく、家臣や兵士たちの視線にまで晒さなければならなかった。

「あ……あまりではありませんか」

ミリアムの両眼から大粒の涙がこぼれ落ちた。

「これ以上わたくしを辱めるのでしたら……舌を噛み切って死にます！」

クロードは、せせら笑った。

「どうぞ、お好きなように」

「本気にしていないのですね」

「まさか。国王夫妻と共謀して、我が国をエルバインに売り渡そうとした罪を認めて自決なさると言うのでしたら、それはそれで結構。裁判の手間が省けます」

「……………」

ミリアムは歯ぎしりした。が、理屈を好き勝手にねじ曲げる相手には、なにを言っても無駄だとミリアムは諦めた。

ミリアムは舌の先端を歯に当てた。

「しかし、そうなると。ミシェル殿を裁判にかけねばなりませんな」

クロードの言葉が、ミリアムの決意をぐらつかせた。

「ミシェルに、なんの関係がありますか。あの子は、まだ7歳。幼い子供まで辱めようというのですか！」

「どなたかを裁判にかけないことには、国王夫妻の罪状が明白になりませんからな。姫君、あなたがおとなしく裁判を受けられるなら、ミシェル殿を死刑にしなくてすむかもしれませんぞ」

「卑劣な……」

ミリアムは怒りに燃える眼差しでクロードをにらみつけた。

クロードは右手を軽く振って、ミリアムの視線を払いのけるような仕草をした。

「お姉様！」

ミシエルの叫び声がミリアムの耳を打った。重い首枷に振り回されながら、声のきこえた

ほうを見るミリアム。

大広間の入口に、兵士たちにはさまれてミシェルが立っていた。寝間着の上にガウンを羽織った弟は、とくに拘束されてはいないようだった。

「お姉様、裸でなにをしてらっしゃるの？」

ぼかんとした表情で尋ねる弟。ミリアムに答えられるはずがなかった。

「ご心配なく、ミシェル殿下」

クロードが平然と答える。

「これは、ミリアム様のお嫁入り前の儀式です。しばらく会えなくなるので、お別れの挨拶をしておきたいとミリアム様がおおせになりました。大人だけの秘密の儀式の場ではございますが、あえて殿下にお出まし願ったわけです。そうですね、姫君？」

「お、おのれ……」

よくも、そのようなでたらめを……という言葉は、ミシェルの背後に立つ兵士の手に握られた抜き身の短剣を見て、喉の奥に消えた。

「そうですよ、ミシェル。わたくしだけでなく、お父様とお母様も、あなたに会えなくなります。そのあいだ、乳母たちの言いつけをきちんと守って、いい子にしているのです。約束してくれますね」

煮えくり返る怒りを抑えて、ミリアムは弟をさとした。自然と浮かんだ弱々しい微笑みは、自身の運命を甘受する諦めの表情だったかもしれない。

寝ぼけているのだろう。姉ばかりか両親にも会えないと聞かされても、ミシェルは無表情だった。

「はい、いい子にしています」

作法どおりに頭を下げ、ミシェルが答える。

「おお、殿下はおねむのようですな。ご苦労様でした、もうお引き取りください。よろしいな、姫君」

クロードの合図で、ミリアムの両脇から兵士たちが離れる。首枷が重たく肩に食い込む

が、弟に不審をいだかせないために、ミリアムは自分の意思で立ち続けていなければならなかった。

兵士に付き添われて廊下を遠ざかっていくミシエルの姿を見送るミリアムの間近に、クロードが近寄った。

「姫君にも、いい子で裁判を受けていただきますでしょうか。なにしろ、エルバインの王子にこの国を高く売りつけようとした張本人なのですからな」

ミリアムはクロードをにらんで、黙って立っていた。なにを言っても無駄だったし、このような理不尽な言いがかりにまともに反論すること自体、王女としての誇りが傷つけられる。

クロードは、つと手を伸ばしてミリアムの尻を撫でた。

「この柔肌でラインハルト王子をたぶらかしたのですな」

「……………」

歯を食いしばって、おぞましい掌の感触に耐えるミリアム。悲鳴や抗議は、この卑劣漢をつけ上がらせるだけだった。しかし無言の抗議も、まったく役に立たなかった。

クロードはミリアムの身体じゅうを両手で撫でまわし、乳房をさすり、ついには股間にまで手を差し入れた。

「ひゃっ……！」

さすがに狼狽して、ミリアムは狼藉から逃れようとした。が、片手で腰を抱きすくめられ、抵抗を封じられてしまった。

「そして、この蜜壺で王子をとろかした———
—そうですな、姫君？」

渾身の力で閉じ合わせた太腿を割って、クロードの指がこじ入れられる。

「いやっ、やめてください……！」

必死で守ろうとしている部分の上端を指の腹でこすられて、ミリアムは身悶えた。

「おやおや。王子には股をお開きになっても、
宰相ごときには指1本挿れさせてくださらな

いのですかな」

「……勝手なことを言わないでください。ラインハルト様……いえ、どなたにも、身を委ねたことなどありません」

クロードにではなく、大広間にいる家臣たちに向かって、ミリアムは淑女としての誇りをかけて訴えた。王女の視線の一端に触れてうつむく者も、いないではなかった。が、ほとんどの連中は囚われの美少女の裸身を、とりわけてクロードの右手が押し開こうとしている部分を熱心に見つめるばかりだった。彼らの耳にはミリアムの悲痛な叫びも、受難劇の伴奏にしか聞こえないのかもしれない。

「痛っ……！」

ついに未踏の奥地へ侵入されて、ミリアムは短い悲鳴をあげた。

(痛い！)

美里の意識も、はっきりと未知の痛覚を感じていた。

(指1本でこんなだと——ロスト・バージン

ってすごく痛そう。でも、愛があれば潤うって
いうもの。だいじょうぶよね？)

ミリアムから離れて、美里として考えよう
とした。それというもの

(ほんとうに、これは夢なんだろうか？)

自信がなくなってきた。首枷を床に打ちつ
けたときの苦しさ。そして、この痛み。まだ
目が覚めないなんて……

「痛い、痛い……お願いですから、やめてく
ださい。裁判を受けます。このまま裸を晒し
て辱めようと思し召しなら、それでもかまい
ません。ですから……ああっ！ そのように
指を……いやあ！ 指を抜いてください」

身体の中心を深く抉られて、ミリアムは泣
き叫んだ。

「クロード殿。そこまでされることはなかろ
う」

さすがにミリアムを哀れんでか、重臣のひ
とりがとりなした。

「ミリアム殿に嫌われては、のちのち差し障

りがありましたしょう」

ちっと小さく舌打ちして、クロードは右手をミリアムの股間から引き抜いた。湯気の立ちのぼっている中指を鼻先にかざしてにおいを嗅ぎ、ぺろりとなめてみせる。

「極上のチーズだが、ちと塩味がきつすぎるな」

さすがに、クロードの下品な冗談につき合っ
て笑う者はいなかった。

「おい、そこの――」

控えている兵士にクロードが命令した。

「この娘を地下牢へ連れて行け。売国奴は地下牢の一番奥だ。間違えるでないぞ」

わざわざ指示をつけ加える。

2人の兵士が進み出て、ミリアムの首枷をつかんで向きを変えさせた。

玉座の前から扉まで、ミリアムは首枷で拘束された裸身を大広間に集まった多くの者たちに晒しながら歩まねばならなかった。

ミリアムの背後で大広間の扉が重い音を立

てて閉じる。兵士の持つ松明で作られた自分の長い影を追って、首枷の重さによるめきながら、ミリアムは石造りの廊下を歩いていった。何度も首枷をこづかれて、枝道に入り階段を下りる。そのたびに通路の幅が狭くなっていく。

「あっ！」

ミリアムは暗がりですまずいて、前を歩く兵士の背中にぶつかった。

「おととと……」

その兵士は振り向いてミリアムを抱きとめ、ついでにたっぷり全身を撫でまわす。首枷が兵士の胸に当たって、ミリアムの裸身とのあいだに十分な空間があった。後ろの兵士がわざとぶつかってきて、背後からミリアムの乳房をつかむ。

ミリアムには、下賤の者を咎める気力も残っていなかった。むしろ——このような者どもまで積極的に謀反に加担し、彼女を辱める。その事実にあらためて打ちのめされた。

幕間の陵辱劇が終わると、ミリアムは地下牢へと引き入れられた。父王ロベルトは国民に優しい支配者だった。罪人はすべて城外の小屋に収用されていて、長年のあいだ地下牢は使われたことがなかった。

ほこりっぽい臭いが漂う無人の地下牢の最奥部へ、ミリアムは連行された。通路の左右に岩をくり抜いた部屋が並んでいた。扉はなく剥き出しの鉄格子で仕切られ、奥の壁には鎖が垂れ下がっている。そこが、ミリアムに割り当てられた牢獄だった。

鉄格子の一部が軋みながら小さく開いた。そこをくぐるのにミリアムは腰をかがめねばならず、無防備に突き出した尻をまた兵士たちに躡られた。

ミリアムは床に座らされた。短い鎖で腰を壁につなぎ止められると、立ち上がることも横になることもできなくなった。

「それじゃ達者でな、王女様。あんたの柔らかなおっぱい、一生忘れねえよ」

兵士はミリアムをからかったが、それほど悪意のある言葉ではなかった。とはいえ、それはなんの救いにもならない。牢獄でただひとつの明かりだった松明を持って兵士たちは去り、ミリアムは真っ暗闇の中にひとり放置された。

——完全な暗黒ではなかった。地下深くだが、どこかに地上に通じる窓があって、そこから月明かりが洩れてくるのだろう。闇に目が慣れてくると、鉄格子がシルエットのように浮かび上がってきた。夢の世界にふさわしい光景だった。

しかし。

時間が経つとともにいっそう肩に食い込んでくる首枷の重さ。床につけた裸の尻から這い昇ってくる石の冷たさ。このリアルな感覚が、ほんとうに夢なのだろうか。

大広間で廷臣や兵士どもの注視する中で辱められた悔しさ。父母を殺された怒りと悲しみ。なんとか弟だけは助けてやりたい、この

焦燥。そして、自分を待ち受けている運命への絶望。この激しい心の葛藤も、つかの間の夢なのだろうか。

(もしかすると……)

あたしは、気が狂いかけているのかもしれない。無惨な現実には耐えられず、自分をはるか未来の異国の少女だと思い込もうとしているんじゃないだろうか。

白石美里としての意識が、ミリアムの身体を動かすことはできなかった。それは、絶対に実行できない空想と似ていた。

着飾って舞踏会に出て、ちょっと退屈したとき。もし、給仕のお盆から強いお酒を取って飲み干せば――殿方は、どんな反応を示すだろうか。そんなことを考えてみるけれど、王女として淑女として、絶対にそんなはしたない真似はできない。卒業式の時だって、そうだった。クラスメートと別れるのは悲しかったけど、進学先での新しい生活への憧れのほうがずっと強かった。長い春休みも楽し

みだった。なのに、勝手に涙が出てしまった。

(……もう、いや！)

記憶が混乱して、彼女は悲鳴をあげた。

(夢よ、絶対に夢にきまってる)

美里がミリアムの夢を見ることはできる。
でも、ミリアムが美里を空想の人格として作り出せるかしら？

飛行機とかテレビとか通販とかスマホとか……地球が太陽のまわりを回っていることも知らなかった中世の人間に、考えつけるはずないじゃない。

あたしは白石美里なのよ！

声を出して日本語で叫ぼうとして……できなかった。頭の中では自然に使える言葉なのに、どういうふうに発音していいか、ぜんぜん分からなかった。

そんな、馬鹿なことって……

彼女はブルッと身体を震わせた。美里としての意識、ミリアムとしての記憶。けれど、肉体は間違いなくミリアム・ペルブランのも

のだった。

日本より緯度の高いヨーロッパの晩秋。夜更けの冷え込みは厳しい。まして、暖房のない地下牢。暖かな夜具に慣れた王女の身には、とても耐えられない寒さだった。

そして寒さ以上に。肩に食い込む首枷の重さに、ミリアムはあえいでいた。横座りの姿勢でじっとしていると、背骨が痛んでくる。首枷がじゃまをして、壁にもたれかかるともできない。膝を曲げて足を前に投げ出し、上体を倒して首枷を腿にあずけると、すこし楽になった。

首枷とどうにか折り合いがつくと。ミリアムは、より切迫した問題に直面せざるをえなくなる。

お腹が冷えて、どうしようもなくトイレに行きたかった。

「誰か、誰かおらぬか」

体を起こしてミリアムは人を呼ばわった。返事はなく、ミリアムの声は石の壁に反射し

て、むなしく闇に吸い込まれていく。

「ああ……」

下腹部が圧迫されるのを感じながら、首枷の辛さに負けて上体を曲げる。

いっそ漏らしてしまったら……目が覚めるだろうと思う。けれど、実行できなかった。おねしょなんて恥ずかしい。それに、もし万一、目が覚めなかったら？

自分はミリアムなんだろうか？ 美里なんだろうか？ どっちでもいいから、この苦しみから解放されたかった。

美里としては……裸で縛られて暗闇に放置されるなんてシチュエーションに憧れていた。おしっこにも行かせてもらえなくて、がまんできなくて漏らしてしまっただけ、それをご主人様（それとも誘拐犯？）に見つかって、からかわれたりお仕置きされたり。でも……こんなのは厭だった。王女としてかしずかれてきた家臣たちの目の前で両親の仇に辱められ、そのうえ、よりいっそうの辱めを受けるため

に牢獄につながれるなんてのは——とても耐えられなかった。ミシエルのことさえなければ、とっくに舌を噛み切っていた。だけど。弟の命を救うためには、クロードの筋書きどおりに裁判で有罪を認め、みずからの手でみずからを陵辱の場に捧げなければならないのだろうか？

(そんなことはない！)

ミリアムは、心の中で強く叫んだ。

エルバインの第2王子、ラインハルト・ベナール様！

あの方が、きっと助けに来てくださる。ラインハルト様直衛の騎士団だけでも、この国の全兵力に匹敵すると父様がおっしゃっていた。かりにクロードが近衛部隊だけでなく国中の軍隊を謀反の味方につけていたとしても、勝ち目はない。

絶望することはない。屈辱を嘆く必要もない。

(見ているがいい、クロード)

インターネットがなくてもテレビがなくても電話がなくても郵便がなくても、隣国まで謀反のニュースが伝わるのに1週間とかからない。ラインハルト様がお前の悪事を耳にさった、そのときが——お前の最期になることでしょう。

それまでのあいだ、どのような辱めを受けようと……耐え抜き生き延びてみせる。ミアムは固く決心した。

(それまでに夢が覚めなければ——だけどね)

それまでのあいだ、どのような辱めを受けるのかしら。美里は、ロードショーを独り占めしてるみたいな気分で考えた。

たしかな希望を見いだして心が落ち着いてくると、どっと疲労が押し寄せてきた。ミアムは尿意にさいなまれながらも、うとうとし始めた。

1 - 2 プロポーズは拷問

鉄格子の軋む音で、ミリアムは目覚めた。

やはり、どこかに明かり取りの窓があるらしい。鉄格子を開けようとしている男の姿が、はっきり見えた。貧相な顔つきの小男で、粗末な布の服を着て帯のかわりに縄を腰に巻いていた。庶民の事情にはうといミリアムでも、この男がごく低い身分の者であることはひと目で分かった。

男は牢を開けて入ってきて、うずくまっているミリアムの腰から鎖をほどいた。

「出る」

ミリアムは、まさか小男が自分に命令しているとは思わなかった。ぼんやり男のすることを眺めていると、尻を蹴られた。

「出ると言ったぜ。昨日までは王女様だったかしらんが、今のおめえは囚人なんだ。この牢屋じゃ、俺様の命令に従ってもらわんけりやな」

ミリアムは、黙って身を起こした。首枷の重みでほとんど四つん這いになって、鉄格子の小さな扉をくぐった。たいして腹も立たなかった。この牢番は、牢屋の規則に従っているだけだ。憎むべきはクロード。そして、彼に追隨した一部の貴族ども。ラインハルト様の助けを得て国を取り戻したら、彼らは極刑に処してやる。けれど、この者は――まあ、鞭打ちくらいで許してあげるわ。

小男はミリアムを通路の奥へ追い立てた。そこは行き止まりになっていて、壁にランプが吊るしてあった。小男がランプに灯をともした。

「そこで用を足しな」

小男が床を指さした。よく見ると、床に浅い溝が掘られていた。行き止まりの壁の下に穴があって、溝はその中へ続いていた。

王女だった身には、その溝がなんのためにあるのか分からなかっただろう。しかし美里の思考は、この場所の役割を理解した。とは

いえ、いくら切羽詰まっているにしても、小男の命令に従えるものではない。

「王女様は汚いものをお出しにならねえってんなら、それでもいいんだぜ。けども、他の場所で粗相してみやがれ。そのきれいな金色のおぐしで拭き掃除させてやるからな」

ためらっているミリアムの背に、小男がおぞましい言葉を投げかけた。

表情の動きに乏しいこの男は、自分の言葉を忠実に実行するだろう。ミリアムは、その光景をちらっと頭に浮かべて身を震わせた。観念して、溝をまたいだ。

「こっちを向け。俺様の見えないところで悪さをされちゃたまんねえ」

怒りと羞恥で頬が紅潮するのが、自分にも分かった。が、それは一瞬だった。下賤の者に見られたところで、どうということはない。王族や貴族にとって、官位も持たない平民は対等の人間ではなかった。排泄するところを犬や猫に見られて恥ずかしがらる人間がいるだ

ろうか——と、自分に言い聞かせて。ミリアムは牢番に向き直り、溝をまたいでしゃがみ込んだ。

さすがに、すぐにはできなかった。目を閉じて小男の存在を忘れようと努め、深呼吸して全身をリラックスさせる。

小男はなにも言わず、辛抱強く待っている。

どれくらいの時が経っただろうか。むず痒いような灼けつくような感覚が、下腹部をくすぐった。と同時に、岩からにじみ出た清水がこぼれるようにか細い水流が溝を流れ始めた。水流はじきに、滝からなだれ落ちるような勢いに変わった。そして滝の奥からは、柔らかな岩塊まで転がり落ちてきた。

「……きゃあ！」

生理的要求を解消してほっとしていたミリアムは、下半身に冷水を浴びせられて悲鳴をあげた。目を開けると、小男が桶を持って立っていた。

「じっとしてろ。後始末をしてやっから」

「無用です。自分でします！」

反射的に抗議したが、首枷に拘束されているのは、自分でできるわけがなかった。小男は鼻先で笑って、桶をミリアムの真下に置いた。

「後始末なんか、してほしくない。わたくしは、このままで平気です」

口にするだけで恥ずかしいことだったが、このような男に大切な場所を洗われるなんて身の毛もよだつ思いだった。が、小男はミリアムの叫びを無視して手に水をすくった。

「お前さんは平気かもしんねえけどな。糞小便にまみれた囚人を偉いさんにお見せするわけにもいかねえのさ」

ミリアムを片手で羽交い締めにして、短い足で太腿を押さえつけ、手にすくった水で丹念に下半身を拭き清める。

「ああ……いやあ……！」

後始末というにはあまりにしつこい、小男の指の動きだった。身をよじって逃れようとしながら、ミリアムは腰のあたりに奇妙な感

覚が芽生えてくるのに気づいていた。

「いやあ……もうよいです。やめて……お願いですからやめてください」

小さな芽のような箇所をつままれて、ミアムは下賤な牢番に許しを乞うた。その泣き声に甘やかな響きが忍んでいることに、彼女は気づかない。

「そう邪険にしなさんな。おめえは半年ぶりのお客さんだ。いや、若い娘っこなんて十年ぶりかな。それによ。ここですこしでも楽に暮らしたいと思うんなら、俺様に逆らわないこったぜ」

羽交い締めにしていたほうの手で、乳房までまさぐる。

「やめろと申しておる！」

ふだんなら近寄せるだけでもけがらわしい身分の者に秘所を探られているというのに、あろうことか、それがけっして厭でなくなりかけている自分に愕然として、ミアムは気力を振り絞って叫んだ。肩を思い切りひねっ

て、首枷を小男の頭にぶつけた。

「あちっち！」

小男は頭を押さえて床に転がった。

「そうかい。俺様を敵にまわそうってんだな。
後悔するぜ」

起きあがりながら、忌々しそうにミリアムをにらむ小男。が、それ以上の悪戯を仕掛けようとはしなかった。何事もなかったかのような態度でミリアムを引き立てた。

ミリアムは、それまでの独房とは別の、地下牢の入口に近い部屋へ連れて行かれた。頑丈な扉が開くと、まぶしい明かりが部屋から流れ出た。

部屋に足を踏み入れたミリアムがまっ先に気づいたのは、仇敵クロードの存在だった。部屋の一画に、王宮の一室かと思まがう豪華なテーブルと長椅子がしつらえてあった。クロードは赤い布地に金糸の刺繍を散らした悪趣味なガウンを着て、長椅子にゆったりと座っていた。屈強な身体つきの男たちが2人、

彼の背後に立っていた。こちらは、素肌の上
に皮革の胴衣を着込んでいる。

「これはこれは姫君。昨夜は快適にお休みに
なれましたかな」

ミリアムはクロードの言葉を黙殺した。が、
クロードは気にしたそぶりもない。

「姫君を楽にしてさしあげろ」

クロードの後ろから革服の男たちが進み出
て、ミリアムに近づく。また新たな辱めを強
いられるのかと、ミリアムは身体を固くした。
しかし意外にも、ミリアムをはさんで立った
男たちのしたことは、首枷の留め金を外すこ
とだった。ミリアムは首枷から解放された。
肩が首が、そして両手が自由に動かせるよう
になった。

「こちらへお座りいただけませんか、姫君」

クロードが長椅子の一端を指し示す。

ミリアムはクロードの言葉に従った。彼に
心を許したわけではなかった。屈服したのも
ない。どうせ拒んだところで、屈強な男ど

もに力づくで強制されるに決まっていた。心ならずも、ミリアムはクロードのかたわらにはべることとなった。

クロードは、図々しくもミリアムの肩を抱き寄せる。

「むごい扱いをして済まなく思っております。あの場は、ああしなければ皆がおさまりませんでしたので」

「……………」

ミリアムは、クロードにされるがままになっていた。けれど、彼の言葉に耳を貸す気にはなれなかった。このお為ごかしの優しさに隠された真意を、ミリアムは疑っていた。

(分かりきってるじゃない)

美里の意識は、これからの展開を知っていた。この部屋で贅沢な調度は、この一画だけだった。あとは一一壁に打ち込まれた鉄環、天井から吊るされた滑車と鎖、さまざまな形をした木製の台。そして、壁際の棚に並べられた鞭。ここは拷問部屋だった。

どうせ裁判は茶番劇だ。ミリアムが有罪を認めなくても、クロードに不都合はない。だから、この部屋を有効に使うためには、もっと別の無理難題が必要なはずだ。

「皆を納得させるには、姫君を処刑するしかない情勢に至っております」

それは嘘です——とミリアムが叫んでも、証拠はない。クロードの言葉にも裏付けなどないが、この場を支配しているのは彼だった。

「ですが、姫君をお助けする手だてがないわけではありませんぞ」

クロードはミリアムの肩を撫でながら、もう一方の手で彼女の金髪をもてあそぶ。

正面を見つめて身じろぎひとつしないミリアム。

「おや……ご自分のお命がかかっているというのに、関心はおありになりませんか？」

「裁判でも処刑でも、そなたの望むままにするがよい。わたくしは、父母の仇に命乞いするつもりなどありません」

ミリアムは、きっぱりと言った。

クロードは鼻で笑って、金髪を指に絡める。
「それがしの望むがままにと、仰せですか。
では、それがしの妻になってくださるのですな」

クロードには、すでに妻子がある。だが、それはミリアムを名目上の正室として迎え入れる妨げにはならない。実の妻を側室として新たな政略結婚をすることなど、王族のあいだでは日常茶飯事だった。しかし、それにしても、クロードのプロポーズは論外だった。
「誰が、そのような！」

クロードの手を振りほどいて、ミリアムは立ち上がった。

「そなた、気が狂ったのか！ それとも、これが目的か。わたくしに横恋慕して、それでこのような謀反を……」

(起こしたわけじゃないわよね)

激昂して言葉に詰まったミリアムの思考を美里が引き継いだ。

客観的に考えれば、クロードの思惑は明白だった。第1王位継承者たるミリアムを妻に迎えば、クロードの反逆は大義名分を得る。すくなくとも形式の上では、アルザス王国の正当な支配者になれる。エルバインに武力介入の口実を与えずにすむ。

だからクロードは、いかなる手段を使ってでもミリアムにプロポーズを受け入れさせようとするだろう。そしてミリアムは、ラインハルト王子を裏切って父母の仇を夫に迎え入れるなど、たとえ姉弟ともども殺されることになろうとも、肯んじられるはずもなかった。

「お前に横恋慕？」

クロードは長椅子の上からミリアムを見上げた。

「まさか、な。わしが惚れておるのは、この国だ。このうるわしくも愛すべきアルザスを売り渡そうとしたペルブラン一族の娘に惚れるはずもなかろう」

クロードは、おのれの野心をあからさまに

口にした。

「国民を安心させ他国を納得させるには、わしが王位を継がねばならん。だから、小便臭い小娘が王位継承権を持っているというなら、しかたがない。がまんして娶ってやろうと言っておるのだ」

「な……」

小便臭いだの、がまんして娶るだの、暴言にもほどがある。

「とはいえ、わしの忍耐にも限度がある。わがままを言わずにわしのプロポーズを受け入れたほうが、お前のためでもあるぞ」

「断わります！」

断わったらどうなるか。そんなことは考えなかった。考えたところで、結論が変わるはずもなかったのだが。

「お断わりになる？ このわしが身を屈して申し込んだプロポーズですぞ。一時の感情に流されることなく、再考していただけますか」

「……………」

ミリアムは顔をそむけた。

クロードは満足そうにミリアムの横顔を眺めていた。唇の片端が吊り上がり、不気味な微笑が広がっていく。

「左様ですか。では、致し方ありませんな。考え直していただけるよう、プロポーズの仕方を変えさせていただきますぞ——おい」

クロードは、ミリアムの後ろに向かって顎をしゃくった。2人の男がミリアムの肩をつかみ、部屋の中央へ引きずっていった。

男たちはミリアムの手首に鉄環でできた枷をはめた。鉄環からは長い鎖が伸びていて、それぞれが天井の滑車につながっている。男たちが鎖の端を引いて、ミリアムの腕を左右に吊り上げた。

ミリアムは男たちの乱暴な扱いに抗議もせず、されるがままになっていた。

（そうよ。あたしは辱められ虐められることに慣れてきた美里だもの。なにをされたって

平気だわ)

わざとそんなふうを考えて、屈辱と恐怖を忘れようとしていた。

Y字の形で吊るされたミリアムの前に、クロードが立った。腕の長さと同じくらいの鞭を持っていた。

「お前は、わしの申し出を断わったが——こいつの説得にも同じ返事ができるかな？」

ミリアムの目の前で鞭をしごいて見せた。細い鉄線に革を巻いてあるのだろうか。先端を持って曲げると弓のようにしなり、手を離すとヒュンと音を立てて元に戻った。

「わたくしを拷問にかけるつもりなのですね。好きなようになさい。どのような責め苦を受けようとも、そなたの思いどおりにはなりません」

目の前で揺れる鞭からはさすがに顔をそむけたが、ミリアムは気丈に答えた。

「そう願おうか」

クロードは目を細めて残忍な笑みを浮かべ

た。

「身分のある女を甚振るのは、わしも初めてだ。あらゆる拷問で、お前の悲鳴と涙をたっぷり絞り出してやる。鞭のひと撫でくらいで、足下に這いつくばって慈悲を乞うような情けない真似をするなよ」

クロードは鞭を掌に打ちつけながら、ゆっくりとミリアムの背後にまわった。2人の男たちも、ミリアムから見えない壁際に下がった。牢番の小男だけが、ミリアムの正面で拷問台にちょこんと腰掛けて、彼女の裸身に見入っている。

「さて……」

ヒュン！

空気を切り裂く鋭い音に、ミリアムは身をすくめた。が、予測していた打撃はこなかった。

「……………？」

打ち損じたのかと、すこし力を抜いた瞬間。
パッシイイン！

自分の尻が鞭打たれる乾いた音を、ミリアムは耳からではなく背骨をとおして聞いた。と同時に、灼けるような激痛が下半身を駆け抜けた。

「ぎゃああっ！」

野獣の吠え立てるような悲鳴が、ミリアムの喉から迸った。

（夢じゃない！）

たったひと打ちのあまりの苦痛に、ミリアムは涙を流しながら悟った。白石美里の見える夢なんて、愚かな妄想だった。この痛みは、絶対に現実だった。

「ほっほ。なかなか迫力のある鳴き声だが。売笑婦でも、もうすこしは可愛げのある悲鳴をあげたものだぞ！」

言い終わると同時に2撃目を放つクロード。

「……くうう」

ミリアムは歯を食いしばって悲鳴をこらえた。

「そうそう。その、けなげに可憐に耐える風

情。それでこそ、淑女というもの」

からかわれても、王女の誇りをつらぬくためには耐え抜くしかなかった。ミリアムは足を踏みかえてまっすぐに立った。3度目の鞭には、うめき声すらもらさなかった。4発、5発と続けざまに打たれても、ミリアムの姿勢は崩れなかった。

「たおやかな姫君にしては、尻の皮が厚いとみえるな」

赤く腫れあがった双球に刻まれた紫色の筋を鞭の先端でなぞるクロード。ミリアムは、むず痒いような軽い痛みを感じて、思わず腰をよじった。

「尻の皮は厚くとも……」

クロードの姿が視界にはいつてきた。何気ないそぶりでクロードは鞭を胸の高さで水平にして――いきなりミリアムの乳房に叩きつけた。

「いぎゃあああああっっ！」

ミリアムは絶叫した。反射的に身体をひね

って胸をかばおうとしたが、腕を鎖に引き戻されて、肩がゴキリと鳴った。

「胸は感じやすいとみえる」

クロードは左手で乳房をわしづかみにして、たった今刻みつけたばかりの赤い線條を親指でこねくる。

(違う……)

顔を伏せて暴虐の嵐に耐えながら、ミリアムは心の中で叫んでいた。

虐められたい辱められたい鬪られたいって思ってたけど、こんなのじゃない。痛いだけ。親の仇にもてあそばれて、悔しいだけ。被虐の悦びなんて……嘘。

「おやおや。すっかりおとなしくなったではないか。まさか、わしの妻になりますなんて言い出しはせんだろうな？」

ミリアムは一瞬の思考から我にかえった。

「……けがらわしい」

顔をそむけて吐き捨てる。

「ふん。どこまで痩せ我慢が続くかな？」

思いっきり乳房をひねってから、クロードは鞭を構えなおした。ゆっくりと右手を振りかぶる。その動きが止まった瞬間、ミアムはぎゅっと目をつぶった。

ひと呼吸をおいて。雑巾を床に叩きつけるような音とともに鞭の先端が左の乳首をとらえ、根本が右の乳房にめり込んだ。

「ぐ……！」

ミアムは悲鳴をこらえたのではなかった。あまりの苦痛に息が詰まって、声を出せなかった。

「そら、可愛い声で鳴いてみろ。涙を流して、わしに慈悲を乞うてみろ」

乳首を狙って鞭を斜め上から叩きつけ、返す腕で逆手に斬り上げるように基底部をえぐる。ミアムの乳房はそのたびに、嵐に翻弄される木の葉のように跳ね動いた。

ひと打ちごとに刃で切り裂かれるような苦痛に苛まれながら、ミアムは意識が遠のいていくのを感じていた。

(これで……夢が終わるのかしら)

それは儂い望みだった。鼻を突き刺すいやな臭いが、ミリアムの意識をむりやり闇の外へ追い立てる。

クロードはミリアムの髪をつかんで、顔を引き起こした。

「わしの足下にひざまづいて、妻にしてくださいと乞い願うなら、これくらいで許してやってもよいぞ」

「……………」

ミリアムは今や、クロードに憎悪よりも恐怖を強く感じていた。無言で相手をにらみ返すだけでも、ありったけの気力が必要だった。

クロードは彼女の怯えに気づいたのかもしれない。満面に残忍な笑みをたたえて、ミリアムを見下ろした。

「では、もうすこし積極的に結婚を申し込ませていただくか——おい」

2人の男がミリアムの背後から近づいて、彼女の足首にも鉄環をはめた。男たちは無言

で鉄環の鎖を、床に据え付けられている滑車に巻きつけた。滑車のハンドルを回すと、鎖が巻き取られていく。

両脚を左右に引き裂かれて、ミアムは忘れかけていた羞恥心をよみがえらせた。渾身の力で、腿を閉じようとした。が、拷問で痛めつけられた少女が、屈強な男どもにあらがうことなど、とうてい不可能だった。

クロードは左手でミアムの髪をつかんだまま、右手の鞭を男のひとりに手渡した。そして自由になった手をおろして、X字形に磔にされたミアムの、そのX字の交叉する部分に差し入れた。

「昨夜は手こずらせてくれたが、これでは拒むこともできまい」

秘められた蕾をこじ開けて、指を突き立てようとする。

ミアムは腰をよじって逃れようとするが、そのたびに腕が鎖に強く引かれて肩が痛んだ。ほとんどつま先立ちで吊られているので、動

ける範囲も限られている。クロードは易々と目的を達した。

「痛い……やめてください」

ミリアムは弱々しい悲鳴をあげた。クロードは指を激しく動かすことで、ミリアムの哀訴にこたえた。

「ここが、わしを夫として受け入れてくれんと困るのでな。尻とか胸でなく、ここに直接プロポーズしてやるぞ」

ミリアムはクロードの意図を察して、金切り声をあげた。

「いやあっ！ そんなひどい……死んでしまいます。許してください」

「では、わしの妻になるか？」

「……………」

ミリアムは返事ができない。予告された拷問がどんなに恐ろしいものであっても、心にもないことを言って、あとで言葉をひるがえすなど、彼女の誇りが許さなかった。

「ふん。女の身としては熱烈なプロポーズを

お望みか」

クロードはミリアムの身体から手をはなした。男から鞭を受け取って、それを下向きに構えた。

ミリアムは恐怖に束縛されて、鞭の動きから目をはなせないでいた。

鞭はゆっくりとミリアムから遠ざかり、さまざまの勢いで股間に伸びてきた！

「がはあっ！！」

股間から脳天まで稲妻が駆け抜けたような衝撃がミリアムを貫いた。ミリアムは海老反りになって全身を硬直させ——がくりと頭を垂れた。

ふたたび気付け薬のいやな臭いで意識を呼び戻されたとき、ミリアムの目の前には革服の男たちが立っていた。クロードは、部屋の一面にしつらえた豪華な長椅子にゆったりと座って、ワイングラスを揺らしている。

「色よい返事をする気になったかな？」

ミリアムの心変わりを求めてというよりは、

新たな拷問の口実のために、クロードがおざなりな言葉を投げつける。

ミリアムにも、クロードの本心は分かっていた。

「……殺してください」

ミリアムは弱々しくつぶやいた。

「そなたの残酷な愉しみの玩具になど、されたくありません。もしも、そなたにひとかけらなりとも慈悲の心があるのなら——ひと思いに殺してください」

クロードはワイングラスを飲み干してテーブルに置いた。

「そして、がんぜないミシェル殿下を裁判にかけて死刑にせよ、と？」

「卑怯な……」

ミリアムは歯ぎしりした。

「それがしは、ものの道理を話しておるのですぞ。卑怯とは、心外な」

ミリアムは鎖に吊られてうなだれたまま、しばらく考えていた。

「では、わたくしが生きていれば……弟の安全は約束していただけるのですね」

それはミシエルの姉としての悲壮な問いかけであったが、思考の過程は美里のものだった。篡奪者クロードの都合としては、ミリアムを妻にできないならば姉弟ともども抹殺して、アルザスの王位継承権者を根絶やしにしたいだろう。おのれの野心と引き替えにする危険を冒してまで●6歳の美少女を責め罵りたい男が存在するとは、王女の頭に思い浮かぶはずもなかった。

クロードは牢番の小男に注がせたワイングラスを持ち上げ、ミリアムに向かって乾杯の仕草をした。

「約束してやろう。お前が生きておるかぎり、あの小僧には指一本ふれはせん。お前がわしのプロポーズを拒みとおして、裁判にかけられようとな」

「でも、裁判で死刑を宣告されたら……」

「死刑にはならぬさ」

クロードは、あっさりと請け合った。みずから、裁判が茶番だと認めたようなものだった。そして、すでに絶望の淵に立っているミリアムの背中をひと押しするような科白を吐いた。

「ペルブラン一族が浪費した国民の税金をすこしでも返済させるため、お前は売春宿にでも売られることになるだろう。元王女の娼婦には、とびきりの値段がつくだろうて。それとも、わしが身請けしてやるか。妻としてではなく、妾としてな」

「お、おのれ……」

それ以上は、言葉にならなかった。

(ならば、いっそ……)

どうせクロードの所有物にされてしまうのであれば、形だけでも妻として扱われたほうがましかもしれない。ちらっと、ミリアムは考えた。だが、思いとどまった。クロードの思いどおりになんか、なつてたまるものですか。生きてさえいれば、きっとラインハルト

様が助けに来てくださる。

クロードはミリアムの希望を見抜いているのかもしれない。だからこそ、強引な手段でミリアムを落とそうとしているのだろうか。

クロードは、2杯目のワインも飲み干した。「さて。優しくお願い申しあげるのも、これが最後ですぞ。それがしの妻になっていただけませんか？」

へりくだった物言いだったが、長椅子にふんぞり返っている傲岸な態度は、そのままだった。

ミリアムは黙殺で答えた。

「そうか。わしに抱かれるよりは鞭に愛撫されるほうを望むか。ならば、望みどおりにしてやろう」

クロードは、ミリアムの前に立った男たちに合図した。

男のひとりがミリアムの背後にまわり、もうひとりが正面に立つ。どちらも、長い鞭を手にしていた。クロードが使った鉄芯入りの

鞭と違い、だらりと垂れていて、それほど痛そうには見えなかった。

だが男が軽く腕を振ると、鞭は生き物のようにのたくった。鞭は鮮やかに弧を描いて、ミアムの身体に巻きついた。

「きゃああっ！」

乳房と尻を同時に鞭打たれて、ミアムは悲鳴をあげた。鞭はミアムの肌をこすりながらほどけ、ミアムが息を吸った瞬間に、また襲いかかる。

「ああっ！ ひいい！ いやあ！」

一撃で気絶させないよう、じゅうぶんに苦しみを与えるよう、そしてたっぷりと悲鳴を絞り出せるように計算しつくされた鞭の動きだった。この男たちは、本職の拷問役人に違いなかった。

急所を痛撃されて絶叫し、腹や背中を軽く打たれて思わず安堵のため息を漏らし、脇の下など思いもよらぬ部分に鞭を当てられて困惑の悲鳴をあげ、痛みがやわらぎかけていた

秘部をふたたび鋭くえぐられ、涙をこぼして泣き叫ぶ。さながらミリアムは、鞭で奏でられる楽器だった。聴衆はクロードと、牢番の小男。クロードだけでなく小男も、この演奏会が気に入っている様子だった。

小半時ほどもミリアムは存分に奏でられ、そしてまた意識を失った。

氷の刃で斬りつけられているような痛みで、ミリアムは意識を取り戻した。

(また虐められるのでしょうか)

おそるおそる目を開けるミリアム。小男が水をひたした布でミリアムの身体を拭いていた。痛みの正体は、これだった。

「おや、目が覚めたかね」

小男は手を休めて、ミリアムの顔を見上げた。

「それにしても、まあ、派手に鞭でなめされたもんだ。見なよ」

ミリアムの血でまっ赤に染まった布を、小

男がかざして見せた。

「宰相様が、ここを鉄鞭で打ったときには、壊れちまうんじゃないかと思ったぜ」

小男の手が、ミリアムの股間に伸びた。

「かわいそうに、まっぷたつに裂けて——おっと、はなから裂けてたっけ」

卑猥な冗談を口にしながら、花卉をもてあそぶ。

排泄の後始末をしたときと同じように、小男の指の動きはねちっこく、意外と繊細でもあった。ミリアムの鞭打たれて傷ついた部分に、痒みのようなさざ波が走る。

「ああ……」

甘やかな吐息が漏れてしまった。

小男は乳房にまでさわってきた。さわりながら耳元でささやく。

「お前さんの手当を宰相様に言いつかってるんだが——内緒で医者を呼んでやってもいいんだぜ。どうする？」

「お願いします」

なにも考えずに、ミリアムは言った。言ってから、その代償に思いがおよんだ。

「そうかい。それなら」

小男は滑車を操作して、ミリアムを吊るしている鎖を緩めた。

「こいつと仲良くしてくれよ」

床に膝をついたミリアムの顔の前で、小男はズボンをおろした。

「……………」

猛り狂った物を眼前に突きつけられて、ミリアムは頭をうしろへ引いた。ミリアムは男性の持ち物など見たこともなかったし、性に関する知識も乏しかった。しかし美里は、耳年増とっていいくらい、いろんなことを知っている。小男がなにを要求しているか明白だった。

「けがらわしい！」

吐き捨てて、横を向く。

小男は腰に手を当ててしばらくミリアムを見ていたが、あきらめたのか、ズボンを元に

なおした。

「そうかい。それじゃ医者はやめだ。俺様が手当をしてやる」

滑車を巻き戻して、ふたたびミリアムを吊りにした。前よりも強く鎖を張って、つま先も床から浮かせてしまった。

「実のところ、俺様の手当はそんじょそこらの医者なんかより、ずっと確かだぜ」

拷問部屋にそぐわない豪華なテーブルの上から、酒瓶を取った。

「そのかわり、大の男でも泣いて慈悲を乞うくらい手荒いんだがね」

栓を抜くと、伸び上がってミリアムの肩口で瓶を逆さにした。

「ううう……」

瓶の中身はまろやかなワインではなく、おそろしく度数の高い蒸留酒らしかった。燃えるような痛みが肩から胸と背中、そして下半身へと広がって、ミリアムはうめいた。

「沁みるかね。だが、消毒にはこいつが一番

でね」

小男は流れ落ちる酒を掌にすくって、傷口に擦り込んだ。

「熱い……痛い……やめてください」

あとに痛みが残るとはいえ、鞭の激痛は一瞬だった。しかし、これは違った。酒が腫れあがった肌をじんわりと焼き焦がし、剥き出しの傷口に絶え間なく切り込んでくる。鞭打ち以上に残忍な拷問かもしれなかった。

「だから言ったらう。俺様を敵にまわすと後悔するぜって」

小男はミリアムに抱きついて、全身をくまなく消毒にかかった。雑巾を絞るような手つきで乳房をひねくり、パンをこねるような強さで尻を揉みたてる。新たに酒を振りかけてピシャピシャと腹を叩き、背中では布で力まかせにこすった。

ミリアムはクロードの鞭に屈服はしなかったが、王女としての誇りはすでに打ち砕かれていた。小男の乱暴でいやらしい手の動きに

ミリアムは絶え間なく悲鳴をあげ、すすり泣いた。どうせ、いずれはクロードに犯される運命なら、いっそ小男の要求をいれて、あの醜くおぞましい肉棒を口に含もうかとさえ思った。

「……ひやあ！」

股間にヌメツとした感触を覚えてミリアムは、それまでとは違う種類の悲鳴をあげた。閉じていた目を開けると、小男がミリアムの正面にかがみ込んで、そこに顔を押しつけているところだった。

生暖かい液体が、そこに侵入してきた。小男が、ミリアムの中に火酒を口移しで注入したのだった。

「な、なにを……ああっ、んんっ」

小男はミリアムの股間に舌を這わせて、したたり落ちる酒をすすった。

柔肌を酒精に灼かれる熱さと小男の執拗な舌の動きとに刺激されてミリアムは、はしたない声をあげてしまった。

そこまでミリアムを追い込んで、小男はそれなりに満足したのかもしれない。ぴしゃんとミリアムの尻を叩いて立ち上がった。

清潔なタオルで、ミリアムにどうにか耐えられるくらいに手加減しながら、全身をぬぐった。それから、得体の知れない軟膏を傷口に擦り込む。最後に小男は、ミリアムを吊るしている鎖を緩めた。

左手の鉄環が外される。腕を下におろすと、手首が赤く腫れているのにミリアムは気づいた。

小男は、そこにも軟膏を塗りこめてから、包帯を巻いた。そして、また鉄環をはめようとした。

「いやです！ もう許して」

とたんに、頬に目のくらむようなビンタを張られた。

「おとなしくしろ。こいつは、おめえのためでもあるんだぜ。その傷で、薄汚ねえ床に寝てみる。たちまち傷口から毒がはいって、悶

え苦しんで死ぬことになるぜ」

かといって、立っている体力など残っていない。ミリアムは腕の力を抜いて、左手が持ち上げられて鉄環に拘束されるにまかせた。

「そうそう。聞き分けがいいじゃねえか」

右腕も同じようにされた。

「もちっと聞き分けがよかったら、脚は自由にしてやってもよかったんだがな」

本気で残念そうに言いながら、小男は足首にも包帯を巻いて鉄環を嵌め直した。そして、またミリアムを宙に吊った。

すべての処置を終えると、小男は拷問部屋の四隅で赤々と燃えている松明を消してまわった。残る明かりは、テーブルの上に置かれた小さなランプだけになった。

「今日は食事を与えるなどのご命令だ。せいぜい、そこのご馳走に涎を垂らしているこったな」

小男はテーブルの上を指さした。そこには、クロードがほとんど手をつけなかった贅沢な

料理が並んでいる。

「どうしても食いたくなったら『ピエール様』って、大声で叫びな。まず俺様のハムを食べてもらってから、あれも食わせてやる」

そんなふうにより劣な交換条件を持ち出されてみると――ただ手当てを手加減してもらっただけのために、そうしようかと一瞬でも考えた自分が惨めに思えてきた。

「けがらわしい！」

「そうかい。じゃ、勝手にしな」

ピエールと名乗った小男は、テーブルの上のランプをそのままにして、ミリアムに背を向けた。

「ついでに言うておくがな。夜まで便所にゃ連れてってやらねえぜ。立ち小便なんか、するんじゃねえぞ。その金髪で床を拭きたいってんなら、話は別だが」

言い捨てて、拷問部屋から出て行った。

1 - 3 三角木馬上の処女

(白石美里に生まれたかった)

疲れ果て朦朧とした意識の中で、ミリアムはとりとめのない空想を追っていた。

夜も昼もさだかでない地下牢。首枷を嵌められて地下牢奥に連れて行かれたあとだから、おそらく深夜になっている。首枷で両手の自由を奪われた惨めな姿で用を足して、ピエールのいやらしい手で洗われて。また拷問部屋へ戻されて鎖につながれた。

(王女としての教養や礼儀作法を厳しく教えられることもなく適当に勉強して、水遊びがしたくなったら裸も同然の水着一枚で海へ行って、歌が歌いたかったら淑女のたしなみなんか気にしないでカラオケで大声を出して、身分の違いを気にせずに友達とつき合って、家庭では格式張った挨拶なんか抜きで両親に甘えて……)

なにもかも、ミリアムの境遇とは正反対の

美里。遠くの友と話したり空を飛んだり、魔法の世界に住む美里。あまりに満たされているから、たまには虐められてみたいなんて淫らな妄想に耽ったりするんだろう。

ため息をつきながら、ミリアムは小さく笑った。空想の世界の住人が抱く妄想——それが、ミリアムが直面している過酷な現実だった。

現実。それは、間違いなかった。クロードと2人の拷問役人に鞭打たれた肌は熱病に冒されているように熱かった。乳房も尻も、もっと敏感な急所も、身じろぎするだけで新たな痛みをミリアムに送りつけてくる。この苦痛が、夢や妄想であるはずがない。

そして、それ以上にミリアムを苦しめているのは——暗闇の中で、そこだけ明るく浮かびあがった、テーブルの上のご馳走。いろんな感情で胸がいっぱいで、空腹を感じているゆとりさえない。けれど……あのワイン。それから、水差し。ひと口だけでいい。喉をう

るおしたい。

いっそのこと、ピエールの卑劣でおぞましくけがらわしい交換条件に屈してしまおうかと、何度も本気で考えたくらい、ミリアムは喉の乾きに苦しめられていた。彼女がそうしなかったのは――決心がつくまでに、疲労と消耗のせいで浅い眠りに落ちてしまうせいだった。そして、全身の痛みと喉の渴きで目を覚ますのだった。

(頑張らなければ……)

どのように辱められ苦しめられようとも、クロードの無法なプロポーズ（などであるものか！）に屈さず、耐え抜けば――最後には、かならずラインハルト様が助け出してくださる。朦朧とした意識の中で、それは絶対の真理、あらかじめ定められた運命のように思えるのだった。

扉がきしみながら開く音で、ミリアムは目を覚ました。

ピエールの持つ松明に照らされて、クロードが拷問部屋へはいつてきた。背後には2人の拷問役人も付き従っている。ミリアムのみじめな休息は、終わりを告げた。

「おはようございます、我がうるわしの姫君」

片膝をついて腰をかがめ、完璧な宮廷作法で挨拶をのべるクロード。

「気の急くあまり乱暴なプロポーズをしたと、わしも反省しましてな。お詫びしようと思ったが、なにかと忙しい身。このような夜更けに訪れて、まことに申し訳ない次第」

馬鹿丁寧な口上とともに動く口ひげを、ミリアムは無感動に見つめていた。父母の仇をにらみ返す気力も、すでになかった。クロードが僭越にも、国王が公務のときに着る略服に身を包んでいることも、あまり気にならなかった。

クロードの合図で、拷問役人はミリアムを鎖から解放した。その場に崩折れそうになる彼女を支えて、長椅子に横たえる。

ミリアムは、されるままになっていた。クロードが隣に腰をおろすと、わずかに顔をそむけたが、それだけだった。クロードの意図は見当がついたが、どうせピエールにもいじくりまわされ、大広間で晒しものにされた身。長椅子の寝心地の良さと引き替えにしたってかまわない。そんな捨て鉢な気分になっていた。

「おや、今夜はお淑やかですな。だが……またぞろ心変わりされてはたまりませんので」

クロードはミリアムの手首を背中にねじ上げて、縄で縛った。

「これで、ゆっくりと口説けるというもの」

ピエールに注がせたワインを口に含み、ミリアムにおおいかぶさる。

(ひどい目にあわされるよりは、ずっといい……)

父母の仇に口移しで飲まされても、ワインはワインだ。生き延びてラインハルト様にお会いするために――と、自分に言い聞かせる

までもなく。乾ききったミリアムの喉は、ワインをむさぼっていた。

ワインに続いて、生暖かい塊が歯のあいだを押し割ってくる。ミリアムは息を止めて、口の中でおぞましく蠢くクロードの舌に耐えた。もう一度ワインが注ぎ込まれると、素直に飲み干す。

クロードの手が乳首に触れたときは、ぴくんと身体が跳ねた。生理的な嫌悪はもちろんあったが、正体の知れないさざ波のような感覚が全身に走った。鞭で痛めつけられた傷が治りかけているところへ刺激を受けたせいかもしれないなかった。

これまでの乱暴なやり方とはまるで違って、クロードは優しくミリアムの身体を撫でていく。乳房から脇腹を通して尻へ。そして、ミリアムが覚悟していた部分を素通りして太腿へ。

そのうち。みぞおちのあたりが内側から熱くなってきた。空腹だったところにワインを

飲まされたせいだとミリアムは考えた。燃えるような感覚は、しだいに全身に広がっていく。とくに下腹部が、弱火でちろちろと炙られているようだった。もっと強い火で灼かれない。そんな自虐的な欲求さえ、ミリアムの裡に芽生えかけていた。

「あ……」

ミリアムの下腹部をさまよっていた掌が、つと下に滑って、敏感な突起に触れた。そのとたん……なにかがじわっと内側からあふれてきた。思わず、ミリアムは腰をもじつかせた。

（これは……なに？）

ミリアムには初めての感覚だったが、美里にはお馴染みのものだった。

ミリアムの困惑を見透かしたかのように、クロードの指が大胆に突起を撫であげる。

「や……やめてください」

それは女性の本能が言わせた言葉で、必ずしもミリアムの本心ではなかった。クロード

がますます指を激しく動かしても、ミリアムはそれ以上の抗議はせず、ただ息を長く吐き出しながら甘やかな悲鳴を上げるだけだった。

ミリアムは、手を縛られていることにもどかしさを感じ始めていた。せめて片手でも自由になれば、恥ずかしい突起をもてあそんでいるクロードの指をつかんで……もっと恥ずかしいところに導くのに！

すくなくとも、この瞬間。クロードは父母の仇ではなかった。

「ああん……」

はしたなくも鼻声をあげて、腰を浮かすミリアム。それを待っていたかのように。泥沼に踏み込んだときのような湿った音を立てて、クロードの指がミリアムの中心に突き立った。

「あっ……！」

ミリアムは短く悲鳴をあげた。鋭い痛みはあったが、それさえも心地よかった。

「あ、ああっ、あ……」

クロードに操られて、ミリアムは立て続け

に声をあげた。

「たいしたものだな、ピエール。こんな薬をどこで手に入れた？ まさか、悪魔と取引をしたわけでもなかろう」

クロードの声が遠くで聞こえたが、目を閉じて快樂の渦に溺れかけているミアムは、その意味を考えようとしなかった。

「あっ、そこは……！」

渦の中心からさらに後ろをえぐられて、ミアムは身体を固くした。

「心配するな。わしにまかせておけ」

ミアム自身に潤されていた指は、するりと後衛陣地を突破した。

「痛い……」

ミアムの抗議は無視される。

「こっちのほうがいいのか？」

むずかる子供をあやすような猫撫で声とともに、空虚になっていた部分に親指が挿入された。

「これはどうだ？」

「いやあ……！」

親指と中指で身体の内側をつままれてミリアムは叫んだが、鞭打たれたときの悲鳴とは、まるで似ていなかった。

「どうだ、もっと虐めてほしいか？」

クロードが自信たっぷりに囁きかける。

ミリアムは我を忘れて——こくんとうなずいてしまった。

ミリアムを操っていた指が引き抜かれる。同時に、クロードの身を起こす気配。

ミリアムが閉じていた目を開けると、クロードはいそいそとタイツを脱いでいるところだった。その股間にそそり立つ棍棒のような物を目にして、どこか遠くを浮遊していたミリアムの意識は現実に立ち返った。

クロードがミリアムの足首をつかんだ。両手で持ち上げて、肩にかつごうとする。

「ラインハルト様あっ！」

ミリアムは守護神の名を叫びながら、おもいきりクロードの肩を蹴飛ばした。

不意をつかれてクロードは、下半身を剥き出しの無様な姿で床に転がった。助け起こそうとするピエールの手を払いのける。

「ふん。まだ敵国の若造に操を立てるか」

クロードは愉しそうに笑った。

「まあ、よかろう。いずれはわしの前にひれ伏して靴に口づけしながら、抱いてくださいと乞い願うようになるのだからな」

「誰が、そのような……」

反駁しかけて、ミリアムは弟のことを思い出した。ミシエルの生命と引き替えにされたら……そんな屈辱に甘んじなければならないかもしれない。それまでにラインハルト王子の軍が間に合ってくれることを祈るばかりだ。

「それはそれとして」

ミリアムの悲痛な心中には関係なく、クロードは愉しそうに言葉を続ける。

「罪人の分際で、この国の支配者を足蹴にした償いは、させてやらんとな」

2人の拷問役人が、ミリアムの肩をつかん

で引き起こす。

「また拷問にかけるつもりなのですね。気が済むまで、わたくしを鞭打ちなさい」

ミリアムの言葉に、クロードは首を横に振った。

「いやいや。乙女の柔肌をこれ以上に傷つけるほど、わしは無慈悲ではない。お前を鞭で可愛がるのは、その傷が癒えてからだ。今夜のところは、固い椅子に座ってひと晩を過ごすだけの軽い罰で赦してやる」

言葉とは裏腹に過酷な拷問が待ち受けていることは予測するまでもなかったが、具体的にはどのような目にあわされるのか、ミリアムには見当がつかなかった。

拷問役人はミリアムの腕を肩に近いあたりまでねじ上げて、厳しく縛りなおした。縄尻を二の腕に巻きつけて、さらに引き絞る。肩がはずれそうになるほど痛い。このままでひと晩を過ごすのは、それだけで十分に拷問だった。

しかし、クロードの意図は、そんな生やさしいものではなかった。

拷問部屋の一面に引き立てられて、ミリアムは顔色を変えた。クロードの言う「固い椅子」が、そこにあった。それは、大きな丸太から削り出された三角形の台だった。三角形の頂点が鋭く上を向き、底辺は頑丈な脚で支えられている。それは、女性に想像を絶する苦痛を与える拷問道具だった。

「では、そこに座っていただきましようかな、姫君」

クロードの言葉と同時に、ミリアムは拷問役人の手で抱えあげられた。

「いやです！ やめて……お願いですから許してください！」

ミリアムは叫んだ。両脚をかたく引きつけて、三角木馬を跨がないようにする。

拷問役人とピエールが、ミリアムの腿に両側から手をかけて、強引に割り開く。

「いや、いや！ やめて！ 助けて！」

必死に抵抗したが無駄だった。両脚を開いて三角木馬の上に座らされた。ミアムを抱えていた拷問役人が、手を離す。

「ぎゃあああああっっ！」

刃物で身体をまっふたつに切り裂かれるような痛みが、股間から背骨を通過して脳天に突き抜けた。

ぐらりと身体が揺れて、木馬から転げ落ちそうになる。そのまま落ちることができれば、肩の骨がはずれたり腕を骨折したりしても、ミアムは悲しまなかつただろう。だが、そうはさせてもらえなかつた。拷問役人が素早く抱きとめ、まっすぐに起こす。そして、天井から垂れたロープに、ミアムの長い金髪を結びつけてしまった。

ロープが巻き上げられて、ミアムは髪の毛で宙吊りにされた。

せめて股間にかかる重みを減らそうとして、ミアムは太腿で木馬の側面を力いっぱい締め付けた。が、それも無駄な試みだった。足

首に鉄環がはめられ、そこに錘が吊るされた。

「あがあっ！」

ミリアムは吠えた。両脚は錘で伸ばされ、
全体重が三角形の頂点にかかった。

「どうだ。女でなければ味わえない、素晴らしい座り心地だろうが」

クロードがうそぶき、ミリアムの腰を両手でつかんで前後に揺さぶる。

「ぎいいっ！ やめ……やめてください。いや、いやあっ！」

涙で顔をぐしゃぐしゃにして、ミリアムはわめいた。

「そうか。そんなに気持ちいいのか」

ピエールにわざわざ踏み台を持ってこさせ、その上に乗ってミリアムの腰を木馬に押しつけながら、さらに激しく揺さぶる。

「悪魔……ぎゃあっ！ 嘘です。誤ります。お願いですから許して……ぐおお！」

ミリアムは泣き叫びながら意識を失った。

1 - 4 婚約者の裏切り！

そして1週間が過ぎた。

首枷で拘束されて薄暗い独房に閉じこめられ、2日に一度は拷問部屋へ呼び出されてクロードの残虐なプロポーズにさらされた。クロードは、毎回違う責め方でミリアムをもてあそんだ。

三角木馬で局部に裂傷を負わされた翌日は夕方から拷問部屋へ連れて行かれ、冷たい水を張った大桶にひと晩中漬けられていた。

1日をおいて鞭の傷もほとんど癒えると、またX字に吊るされて、今度は全身に大きな針を突き刺された。クリトリスに刺された針の先端を松明で炙られたときは、恐怖のあまり失禁してしまった。そしてピエールは予告していたとおりに、ミリアムの金髪を雑巾のかわりに使った。

逆さ吊りにされて、お尻の穴に強い酒を注入されたこともあった。頭に血が下がって、

そのうえ泥酔状態になったところを鳥の羽やペン先やらでくすぐられて、このときも、もうすこしで「抱いてください」と言わされるところだった。

ミリアムを極限まで責め罵りながら、その一方でクロードはミリアムを衰弱させないよう配慮しているらしかった。食事が与えられなかったのは最初の1日だけで、あとは朝晩に不味いながら一定の量が与えられるようになった。食欲がなくて残そうとしても、無理強いに食べさせられた。拷問のあとに待ちかまえているピエールの乱暴な手当ては、実際に効き目があった。鞭の痕が肌に残ることはなかったし、三角木馬の裂傷もつぎの拷問までにはあらかた治っていた。ピエールの手でネチネチと身体を洗われ（雑巾がわりにされた後は）髪をくしけずられ、ミリアムはその美しさを強制的に保たされていた。

ミリアムの精神は……とっくに崩壊しているもおかしくはなかった。彼女が正気を保つ

ていられたのは、ラインハルト王子への希望を失わなかったからだ。そして、ミシェル。彼女が死ねば弟を裁判にかけて首を斬ると、クロードは何度も言った。ミリアムが生きているかぎり、たとえプロポーズに応じなくても弟の生命は保証するとも。ラインハルトとミシェル。婚約者と弟。この2人の存在が彼女を支え、ある意味では究極の安息へ逃げ込むことを許さなかったのだ。

しかし、この危うい均衡がついに破れ去る日が訪れる。

その日は、いつになく昼下がりからクロードが訪れた。

独房からは、まだ人影は見えない。けれどミリアムは、足音を聞き分けられるようになっていた。わずかな明かりの変化から時刻の見当がつけられるようになっていた。

ピエールが、この刻限に様子を見にやって来ることはあった。だが、クロードが来るの

は早朝か深夜に限られていた。

(……………?)

ミリアムの胸に不安が渦巻いた。重たい体を持ってあましているような足音は、間違いなくクロードのものだった。だが、拷問役人たちの規則正しい足音が聞こえなかった。そのかわり、よほど耳をすまさないと聞こえない、軽やかな足音が一緒だった。

(誰だろう…………?)

そして、クロードはなにを企んでいるのだろう。

独房から見通せる通路に人影が現われたとき、ミリアムは自分の目を疑った。しかし、間違いなかった。クロードと並ぶとひときわ目立つ長身の若い男性。ミリアムと同じ色の髪を短く刈り込んで、ちょっと見には軍人ばいけれど、繊細な顎の線と優美な眉が貴公子のおもむきを漂わせている。彼こそが……

「ラインハルト様！」

喜びに我を忘れて、ミリアムは叫んだ。そ

して、自分の惨めな恥ずかしい姿を思い出して顔を赤く染めた。首枷で手を肩の高さに拘束され、短い鎖で腰を壁につなぎ留められた裸身を、せめて後ろ向きになって隠すことさえできないのだった。

けれど、それはミリアムの落ち度ではない。ミリアムの屈辱をそそぐためだけでも、クロードは八つ裂きの刑に値した。

「おお、ラインハルト様。きっと助けに来てくださると信じておりました」

クロードと並んで鉄格子の前に立った王子に、ミリアムは語りかけた。が、ラインハルト王子はミリアムを無視してクロードを振り向いた。

「こうなってみると、元は王女だっただけに、哀れですね」

「おや、婚約者としては見捨てておけませんかな？」

「まさか。お国の政治に口を差しはさむ気は、ありませんよ」

「ラインハルト様……？」

なにかが決定的に間違っている。そう思いながら婚約者の名を呼ぶミリアムを、クロードがさえぎった。

「囚人の身分で気安く声をかけられるお方ではない。こちらは新アルザス共和国への親善大使、ラインハルト・ベナール殿下だ」

「親善……大使？」

ミリアムは重い首枷を持ち上げて、王子の顔を見た。王子は冷ややかにミリアムを見下ろしている。

「では……わたくしを助けに来てくださったのではないのですか」

「うるさいぞ、女」

それがミリアムの騎士、ミリアムの夫たるべき若い男のいらえだった。

「思い違いをされては迷惑だから、はっきり言うておく。私とアルザス国の第1王女との婚約は、ロベルト王が失脚された時点で反故になっている」

「でも、でも……わたくしを抱きしめて『愛している』と言ってくださったではありませんか。あれは、嘘だったのですか！」

政略結婚。頭に浮かんだその言葉を否定しようと、ミリアムは声を張り上げた。

ラインハルトは、面倒くさそうに首を横に振った。

「物分かりの悪い女だ。私が愛していたのは、伝統あるアルザス王国の王女だった。裸で獄につながれているような女は、私とはなんの関係もない。それに――」

ラインハルトはクロードに笑いかけた。それは、かつてミリアムに向けられた典雅で人なつこい笑顔とはまったく違う、品のない、邪悪でさえある笑いだった。

「宰相殿の恋路を邪魔するほど、私は野暮ではありませんから」

「ラ、ラインハルト様っ！」

もしかしたらクロードを欺くためのお芝居ではないのかしら――とも考えていた。けれ

ど、演技ではあんな表情はできないと、ミリアムは直感した。あの邪悪な笑顔こそが、ミリアムの前でつけていた仮面をはずした、ラインハルトの素顔なのだ。

「なんでしたら、私からもこの女を説得してみましようか。捕らえて1週間にもなるというのに、火傷の痕ひとつ見受けられませんね。甘やかしているのではありませんか」

ラインハルトは平然と、クロード以上に残酷な責めを提案した。こんな男を背の君と思い定めていたのかと、ミリアムは身を震わせた。

「そうおっしゃられると、どうにも恥ずかしい。しかし、妻として人前に出すことを考えると、痕が残っても困りますしな」

「人目につかない部分は、いくらもあるでしょう。私は妻にする女の尻たぶに、我が国の紋章を焼き付けるつもりでしたよ」

「ひっ……！」

その場면을想像して、ミリアムは息を呑ん

だ。

クロードは、しばらくミリアムの裸身を眺めていた。やがて、その視線が股間の茂みで止まる。

「それはしかし、面白くないのでは？ まっ白いケツだからこそ、鞭の痕も映えるというもの。それがしでしたら……そう、茂みの中にひっそりと隠してやりますかな。もちろん、焼き印を捺す前にはきれいに茂みを刈り取らねばならないでしょうが」

ラインハルトと張り合うように、残虐な趣向を考えつくクロード。

ミリアムは、しかしクロードの言葉には反応しなかった。悄然とうなだれて、絶望の深淵に沈んでいた。

頼みとしていたラインハルト王子に裏切られ見放されたという事実が、ようやく胸に沁みてきた。絶対の確信を持って拷問に耐え抜いてきた唯一の希望は、もろくも崩れ去った。王族の誇りを持って弟とともに処刑台に登る

か、クロードに屈して妻となり、彼に正当な王位を与えてしまうか。ミリアムの選択肢は、このふたつしかなかった。

たとえ妻となっても、残虐好みのクロードのことだ。たった今言ったとおりに、ミリアムがおのれの所有物であることを示す焼き印を彼女の股間に刻みつけるだろう。なにかと口実を見つけては、ミリアムを責め罵るだろう。

しかし処刑を選べば、身の毛もよだつ運命が待ち受けているだろう。裁判の場で、真実を告白させるためと称して、ミリアムを拷問にかけるに決まっている。責め殺してもかまわないとクロードが考えれば、これまで以上に過酷なものになるだろう。処刑だって、あっさりと首を斬られるとはかぎらない。クロードのことだ。裸で街を引き回されて最後の辱めを与えられるだろう。息絶えるまで鞭で打たれ続けるかもしれない。磔にされて生きながら炎で焼かれるかもしれない。両手両脚

を別々の馬につながれて八つ裂きにされるかもしれない。

いや……唯一の希望を奪われた今のミリアムには、これ以上クロードのプロポーズを拒否し続ける気力は失われている。

(ならば、いっそのこと……)

ミリアムは不意に顔を上げた。クロードは、まだ何事かラインハルトと話している。

「クロード……いえ、クロード様」

おや、といった顔で振り向くクロード。

「婚約者と思っていた殿方から愛想尽かしをされて、もはやわたくしにはクロード様の他には頼れるお方もございません」

ミリアムの言葉遣いは、身分の卑しい者のそれに自然となっていた。

「もしも、まだわたくしにお心をとどめていてくださるのでしたら——どうか、わたくしをクロード様の妻にしてくださいまし」

「ほほう。これはまた、身勝手なことを。恋しいラインハルト殿下にふられて、あれほど

嫌っておったわしに乗り換えようとは」

ミリアムがついに陥落したと知って、クロードは余裕たっぷりに応じる。

「どのように罵られようと、致し方ありません。でも……わたくしを妻にしてくださり、弟ミシエルの命も助けてくださるのでしたら……わたくしは、誠心誠意クロード様にお仕えいたします。クロード様のどのようなお言い付けにも従います。すこしでもわたくしに落ち度があったときは——いえ、落ち度はなくともクロード様がお望みになったときは、どのようにでもわたくしを罰してくださいませ」

それは、妻になることを誓う言葉としては異例のものだった。むしろ——マゾ奴隷としてご主人様に仕える誓いの言葉だった。

「なかなか殊勝な申し条ではあるが」

クロードは鍵を取って、鉄格子の扉を開けた。

「わしの前に跪いて、どうかわしの妻にして

くださいとお願いしてみろ。ラインハルト殿下が証人だ」

腰の鎖をほどかれて、ミリアムは独房の外へ這い出た。クロードの前に正座すると、首枷もはずされた。

ミリアムは上体を床に投げ出して、あらためて誓いの言葉を述べた。

どすんと、背中をクロードに踏まれた。ミリアムはあらがわない。

「それほどに命が惜しいか？」

「はい」

「妻とは名ばかりで、下女や娼婦のように扱われてもかまわぬと申すか？」

「はい、御意のままに」

どんな屈辱的な質問をされても、ミリアムはすべて肯定した。

「ならば、お前の誠意を見せてもらおう」

背中から足をのけられて、ミリアムは顔を上げた。身分卑しい者の作法を守って、クロードの顔は直視しなかった。

それに気づいてクロードは満足そうにうなずいたが、まだミリアムを赦さなかった。

ミリアムの鼻先まで身体を近づける。

「わしの足に口づけをして、生涯わしに忠誠を捧げることを誓え」

ミリアムは素直に上体をかがめかけて――不意にクロードの腰にすがりついた。

「な、なにををする……？」

うろたえるクロードにはかまわず、ミリアムはクロードのタイツに手をかけて、膝まで引き下ろした。

「わたくしミリアムは、クロード様に生涯の忠誠を誓います」

ミリアムは、萎えているクロードの3本目の足に口づけをした。口づけをしたばかりでなく、それを口に含んだ。

「う……お前は？」

この時代、最下級の娼婦でさえ、そのような淫らな真似はしなかった。生殖器に口で触れるなど、神の教えに背いて地獄へ墮ちる行

為に他ならなかった。だから、ピエールの要求はとんでもなく破廉恥なものだったのだ。しかし美里の意識では、それほどの抵抗感はない。というより、SEXの前には必ずするものとさえ思っている。ミリアムは、自分の行為がクロードに与える感激を計算して行動したのだった。

そしてそれ以上に、ラインハルトに与える衝撃を。

ミリアムがクロードに辱められ、あるいは自分から進んで堕ちていけばいくほど、かりそめにも彼女を婚約者としていたラインハルトを貶めることになる。ミリアムは、そう考えた。

裸で鞭打たれて泣き叫んだわたくしを淫らな目で見つめてください。媚びを売って平気で男根をくわえるわたくしを蔑んでください。股間にクロードの焼き印を刻まれるだろうわたくしを想像してください。どんな罪人よりもむごく責められ、どんな娼婦よりも淫らな

仕草を要求され、家畜なみに扱われる——そんな女でも、クロードの妻として公式の場にいるときは淑女として礼儀を尽くしてくださいらなければならないのですよ、ラインハルト様。わたくしに与えられた汚辱、わたくしに向けられた軽蔑の眼差し。それらはそのまま、あなたに返っていくのです。

それは——男へのあてつけに自殺を図る女性の心理そのものだった。

口の中で急激に膨張するクロードを、ミアムは音を立てて舐めた。唇をすぼめてクロードをくわえ込み、上体を激しく前後に揺すってクロードを責め立てた。

「う、おお……待て。待てと言うに」

クロードは腰を引いてミアムから離れた。ミアムはクロードにむしゃぶりつき、押し倒した。

「これ、なにををする」

ミアムはクロードに馬乗りになった。

「クロード様、わたくしを妻にしてください

まし」

いきり立つ男根を握って、ミリアムは自分の股間にあてがった。自分も急速に潤っていくのが分かった。

「く……」

指先で自分の中心を探ってそこへ男根を導き、腰を落としていく。身体を中心から引き裂かれるような痛みに、一瞬ひるむ。が、ミリアムは息を止めると、思い切って膝の力を緩めた。

「あ、ああっ……！」

脳天に突き抜けるような疼痛。が、そこを鞭打たれたときのような鋭い痛みではなかった。暖かく硬い異物にみずから貫かれて、ミリアムは充足感すら覚えた。

(これがロスト・バージンの痛みなのね。気持ちいいくらい)

美里としての意識は、ひどく冷静にそんなことを考えた。

1 - 0 やっぱり夢だった

「ほら、やっぱり夢だったじゃない」

ベッドの中から手を伸ばして目覚まし時計を止めて、美里はつぶやいた。

(だけど……)

超リアルな夢だった。ほんとうに1週間もミリアムとして地下牢で過ごしていたように思える。でも間違いなく夢だった。だから今、こうして自分の部屋にいる。布団から両腕を出して、パジャマの袖をまくってみた。首枷や鉄環でこすれた痕も、鞭打たれた傷も、あるはずがなかった。うとうと眠っているあいだもミリアムを苦しめていた全身の痛みも今はなかった。

(やだ……)

ショーツがぐっしよりと湿っていた。気持ち悪いというより、そこが満たされていないという不満を強く感じた。目覚める直前に味わった、あの感覚。空虚だったそこを逞しい

男性に貫かれ満たされるという、生理的な充足感が、今は失われていた。

父母の仇でもいい、卑劣な裏切り者でもいい、誰かにそこを満たしてほしかった。

(岡崎先生だったら最高なんだけど……)

美里は両手を布団の中に戻した。そして左手で自分の胸を抱いて、右手はショーツの中へ滑り込ませる。

岡崎数夫、32歳の体育教師。アイドル系の顔に年齢相当の渋みをミックスしたマスクは、女子生徒に人気がある。厳しいところもあるけれど、体育系にありがちな乱暴なところがなくて、男子生徒の評判も悪くない。先生にバージンを捧げたいと思っている女子生徒も何人かはいるはずだった。もっとも、美里の学校でもバージンは少数民族だった。その中でも、結婚まで清い身体でいたいなんて子も絶滅していないし、一度きりの商品なんだから高値で誰かに買ってもらおうなんて子もいる。美里は少数民族だった。それをちよ

っぱり重荷に感じている。

(でも、ミリアムみたいに自分からってのはねえ……)

やっぱり力づくで奪われたかった。縛られて鞭打たれて犯されるってのにも憧れていたけど——ちょっと怖くなった。

(岡崎先生がサディストだったら……)

夢の中で鞭打たれたときの痛みは、今もはっきり思い出せる。快感なんか、ちっともなかった。殺されたほうがましだと思えるほどの苦しみと、憎い仇に辱められる悔しさだけだった。でも、好きな人になら……同じ目にあわされても、感じ方が違うかもしれない。

自分で乳首をクリップではさんでみたことがあるけど、ものすごく痛くてもショーツが濡れてしまった。ドアで指をはさんだときは、ただ痛いだけだったし、ドアにも自分にも腹が立った。

マゾとか被虐ってのは、ただ虐められるんじゃないくて、もっと別の要素があるんだと思

う。

好きだからお前を縛るんだ——なんて言われたら、抵抗できないな。それとも……おとなしく縛られてから、うんと抵抗して厳しい罰を与えてもらっちゃおうか。

左手をパジャマの下に差し込んで乳首を転がしながら、右手を小刻みに動かす。

「岡崎先生っ！」

小さく叫ぶと同時に、美里は小さな絶頂に達した。

よけいなことに時間を使って、朝のスケジュールは遅れ気味だったけれど、ジタバタする気にはなれなかった。美里は物憂い動作でベッドから出て、制服に着替えた。髪の毛のブラッシングはいつもより簡単めで済ませなくちゃ。そう思って鏡を覗き込んで、ふと手が止まる。

そこに写っているのは、ミリアムではなく美里の顔だ。ミリアムより短い、肩にかかるかかからないかの髪。ミリアムに比べると、

ずいぶん子供っぽい印象だ。ミリアムのと同じくらいの可愛らしさ（ということにしておこう）だけど、高さではかなわない鼻。ミリアムよりちょっとだけ太めの頬。

「……ふう」

夢に出てきた美少女と張り合ってもしかなかったのに、ついため息が出てしまう。客観的に見て偏差値60はっていると自分では思っているけれど。ウェストはミリアムより確実に5センチは大きいし。バストは、たぶん3センチくらい小さい。

夢は無意識の願望を映し出す鏡だということを、心理学の解説書で読んだ記憶があるけれど。

「はふう……」

もういちどため息をついてから。適当に髪をまとめて。まだ半分は夢の中にいるような足取りで1階へ下りた。

「おはよう」

食卓で新聞を読んでいる父に声をかけて洗

面所へ。

(トイレで用を足せるなんてひさしぶり……かな?)

夢と現実がごっちゃになりかける。ついでに、またちょこっとさわったりして。

美里が食事を始めると、父はリビングのソファへ引っ越した。自宅の隣が父の経営する工場だから、家を出るのは美里より遅い。遠距離通勤のサラリーマン家庭に比べると、親子が一緒の時間はずっと長いはずだけれど、だからといって親子の会話がはずむわけでもない。美里が食べ始めるのを合図に父はリビングでコーヒー、母はキッチンで後片づけを始めるというのが、ここ数年のパターンになっていた。

美里は食欲がなかった。というより。Hな妄想で頭がいっぱいときは、空腹感もマゾヒスティックな刺激になって、ずっとそのままいたくなるのだった。全然食べないと両親に心配をかけるので、パンを1枚とサラダ

をちょこっとだけ口に入れてミルクで流し込むと、すぐテーブルをはなれた。

——学校まではバスで20分。バスの半分は、美里の通う学校の生徒だ。

「おす、ミリィ。今朝は元気ない感じ？」

●学からずっと一緒だった小林麻美が、美里の肩を叩いた。

「おはよう。ちょい寝不足なの」

「おやま。ミリィもやっとうやく恋に目覚めたとか？ それともあるいはまさかゲームで夜更かし？ どっちもミリィらしくないけど」

美里は学校の成績も中の上あたり、どこと行って目立つところのない女の子だった。制服のスカート丈も膝上5センチと、校則をぎりぎり守っている。クラスの男の子ともあまり話さないし、オタク方面とも縁がない。

「そんなんじゃなくって。なんとなく寝付けなかっただけなんだから」

美里は自分の被虐願望を、親友の麻美にも

知られなくなかった。ライトでポップなSMへの憧れなんてものじゃなくて、はっきり異常性愛だと自覚していた。だから、岡崎先生にもたいして関心がないふりをしている。

「ま、春だもんね」

「だから、そんなんじゃないってば」

麻美も実は美里と同じ少数民族。制服も美里と同じくらいおとなしめだし、校則違反はスマホとリップクリームくらいのもの。頭の中は被虐の妄想でいっぱい的美里より、ずっとまじめで清純な麻美。そんな麻美にからかわれて、美里は内心では苦笑が半分、慥然が半分。

バスを降りると、校門は目の前。

「あ、やってるやってる」

校門の両側に生活指導の先生がならんで、登校してくる生徒たちの服装をチェックしていた。教頭の平賀先生と指導主事の岩田先生、数学の及川先生。そして岡崎先生。

「川田、学ランのボタンが違うじゃないか。」

明日までにつけなおしておけ」

「先週も注意しただろ。スカーフをそんなふう
に結ぶんじゃない」

美里の学校は男子が学ラン、女子は今どき
珍しくセーラー服。衿に白のストライプがは
いっただけの、紺のヤボったいやつ。だも
んで、スカーフを変えたりウエストを絞って
みたり、たいていの子が自分なりに改造し
ている。

「こら中村、どこへ行く。校門はこっちだ」

校門の手前でUターンしかけた3年の中村
京子を、岡崎先生が呼び戻した。

「まるでキャバ嬢みたいな服装では
ないですか。これは元へ戻せますか？」

教頭先生にたずねられた岩田先生が、あ
らためて服装をチェックする。

ほとんどヒップで穿いてる膝上30センチ
(というか股下5センチ)のスカート。上
衣も思い切り丈を詰めてヘソ出し寸前。
胸元も大きく開けてる。

「これだけ改造してれば、もう無理でしょう。これは没収ですね。中村、保健室へ行ってジャージに着替えろ。着替えたら、その服を持って指導室へ来ること」

岩田先生も体育の教師で、岡崎先生の先輩ということになる。けれど、この先生は評判がよくない。生徒は校則を破る存在だと決めつけてるところがある。

「なんでさあ。オレ、今日は頭痛がひどくて学校休むんだよ。病院へ行く途中だから、それを言いに来ただけだぜ。んじゃ、そういうことで」

中村京子は回れ右して逃げ出す。

「まったく、しょうのないヤツだな」

岡崎先生が頭をかいた。けど、それだけ。追いかけて連れ戻すなんてことはしない。

「おはようございます」

美里と麻美はノープロブレムで校門を通過。

中村さんみたいのは行き過ぎとしても、もすこし服装を崩してみようかなと、美里は思

う。服装チェックにひっかかって、岡崎先生に注意されてみたい。でも、思うだけ。まじめでおとなしい生徒って評価はうっとうしいだけだけど、ほかに取り柄がないんだし。

思うだけ。それで、●校2年生までバージンできてしまった。ナンパされてつままない男の子にバージンをあげちゃうのはいやだけど、その気にさえなれば、いくらでも方法はある。SM専門の出会い系サイトで（こっちからのカキコはスパムメールの嵐になりそうだから）、フリーメールで返信してみるとか。年齢をごまかしてSMクラブでアルバイトしてみるとか（年齢はばれるだろうけど、それを承知で雇ってくれるあぶないお店はあると思う）。

今朝の夢でちょっと怖じ気づいたかなってところはあるけど——やっぱり虐められて犯されたいって願望は残ってた。あの夢はSMプレイなんかじゃなくてモロマジの拷問だったから。命にかかわることは絶対にしない、

傷がずっと残るような責めもしない。そういう約束があるなら、自分の意思にかかわりなくサディストの欲望のままに責められてみたいと……やっぱり思う。

でも、思うだけ。実行する勇気はない。バージンのまま卒業して適当に進学して——まさか、文字どおりにバージン・ロードを歩くことになるんじゃないだろうか。そう考えて落ち込むこともある。

「ほんつとに寝不足みたいね」

「ひゃ！」

腕をこづかれて、美里は悲鳴をあげた。

「ごめん。なんかボーッとしてたみたい」

「うん。まったく完全にあますところなくボーッとしてた。教室だよ。またあとでね」

麻美は美里を廊下に残して自分の教室へは行っていった。

美里は隣の教室。ぼんやりと廊下を歩いて教室の戸を開けて。

「おはよう」

クラスメートに機械的にあいさつしながら自分の机へ。最初の授業の教科書を出しながら、ふっとミリアムのことを考えた。

（あの後、どうなるんだろう？）

ミリアムはいちおう王位継承者なんだから、クロードと結婚式を挙げることになるだろう。そしてクロードがアルザス国の正当な支配者になって。ミリアムは、クロードが飽きるまで罵られて……捨てられるのかな。家臣に払い下げられるとか。政略的な駆け引きの道具として、他国の使者を身体でもてなす役目を強制されるってのも面白いかもしれない。それとも。クロードはフェラチオにずいぶん感激してたみたいだし。かけがえのないマゾ奴隷として、それなりに大切にされるかも。

初めての男性は忘れられないっていうけど。そのうちミリアムもクロードになびいたりするかな。拷問は苦しいだけだったけれど、そうなると感じ方も変わってくるんじゃないかな。

だけど、どっちにしても……クーデターの夜、大広間にいた家臣たちは、みんなミアムの裸を見ている。クロードの妻として夜会なんかに出席するとき、ミアムも家臣たちも、どっちもやりづらいただろうな。クロードはそれを楽しんで、ミアムに露出の多いドレスを着せたりして。もちろん下着は無し。

被虐のヒロインと夢の演出家を兼ねてあれこれ考えているうちに――朝起きたときに替えたショーツが、またじんわり湿ってくる。

美里はその日ずっと、麻美が言うところの寝不足状態が続いた。

